The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	平成二十年度博士論文(課程)要旨
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2010, 50, p. 61-141
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10178
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

平成二十年度博士論文（課程）要旨

持続としてのイマージュ

― ベルクソンの哲学における持続の現実的多様性について ―

平光哲朗

本稿はベルクソンの哲学における外部知覚の問題系の考察を通して、この現実的世界を持続の多様性の観点から理解することを目的とする。

第一章ではベルクソンの外部知覚論を特徴づける「イマージュ」の概念を、持続の観点から捉え直す。『物質と記憶』第一章でベルクソンは知覚と知覚対象は一致し、物質的事物それ自体がイマージュであると述べる。このことから物質的世界はイマージュの総体として概念化される。この主張は理論的には純粋知覚という想定によって裏付けられるが、経験的な論拠を持たない。ベルクソンにとって経験は意識の持続から捉えるべきものであるのだから、イマージュという概念も持続の観点からの考察に基づいていなければならない。その考察は『物質と記憶』第四章に見出される。そこでベルクソンは運動の知覚を巡る考察を通して、物質的世界を「ひとつの動的連続性」としての全体的な状態変化と認めている。そしてベルクソンはこの概念を、縮約という記憶の働きを手掛かりに持続として捉え返している。われわれは物質的事物の諸瞬間を凝縮し感覚的性質として知覚している。この凝縮に縮約という記憶の働きがある。この働きを緩めることを想定すれば、われわれは物質的世界の状態変化の動性を自らの身体的な運動の動性から捉えることができる。このように知覚を縮約という記憶の働きから捉え直すことで、われわれは物質的世界を持続の程度の多様性として理解することができる。

第二章では縮約という記憶について議論する。この概念についてはドゥルーズとウォルムスの言及がある。ドゥルーズは純粋記憶の領域に縮約の働きを見出している。他方ウォルムスは縮約を純粋記憶と身体の記憶という記憶の二形式を総合する働きとして解釈している。われわれはベルクソンがこの記憶の概念から諸存在を意識の緊張の程度として把握するに至ること、そして外部知覚との関わりのなかで縮約の存在理由を考察していること、この二点に重点を置いて解釈する。ベルクソンは『物質と記憶』第四章において縮約という概念から精神と物質を意識の緊張の程度として一元論的に把握している。しかし精神を意識の緊張の程度として理解する観点は明示されてはいない。ドゥルーズの解釈を敷衍することで精神についても意識の緊張の程度として理解しうるだろう。この理解からわれわれは諸存在全般を持続のさまざまな程度として考えることができる。またベルクソンは物質的事象の

諸瞬間が感覚的諸性質として凝縮されることにより、それに引き継がれる行動が不確定性を高めると考えている。この点に持続の現実的な現われとして生物を考察する可能性が開かれている。

第三章では『創造的進化』の「砂糖水の比喩」に注目する。われわれは外部知覚の観点からこの比喩を解釈し、さらに「具体的全体」の観念を持続の現実的多様性として理解する。砂糖水の溶解に待たされる意識の経験はわれわれの外部知覚の経験であり、その経験はわれわれ生物の身体における生成の構造から理解できる。私の身体における現在は、縮約としての記憶により現出する感覚的性質から行動への絶えざる生成である。この構造から私の意識が砂糖水の溶解に「待たされる」ことはまず、われわれがそこに展開されているある時間性を、絶えず感覚へ縮約することで成立していると考えられる。砂糖水の溶解が私を待たせることは、私の意識がその時間性を縮約することで絶えず不確定性としての未来を開いていることを意味する。他方、縮約としての記憶は物質的対象が存在するその場所において認められるものである。われわれは砂糖水の溶解という物質的事象の持続を、凝縮して知覚しているに過ぎない。砂糖水の溶解それ自体においても未来の未決定性は原理的に認められる。このことからわれわれは「具体的全体」の観念を、われわれの身体、生物の身体、そして物質的事象がさまざまな程度において持続し連帯するこの現実的世界を表すものとして理解するのである。

フッサール最晩年の思想
― 世代発生的問題と現象学の自己批判 ―

前田直哉

本研究ではフッサール後期現象学の中でもとりわけ「最晩年」と呼ぶに相応しい一九三〇年代の思索に焦点を当て「世代発生的問題」並びに「現象学の自己批判」という、差し当たりは独立して取り扱うことのできる二つの問題系について主題的に考察する。その際、前者「世代発生的問題」に関しては現代アメリカを代表する現象学者アンソニー・スタインボックが一九九五年に発表した〝Home and Beyond〟を取り上げ、そこで提唱される「世代発生的現象学」を考察の手引きとする（第一章）。他方「現象学の自己批判」に関してはフッサールの最後の助手を務めたオイゲン・フィンクが一九三二年に執筆した『第六デカルト的省察』を取り上げ、そこで展開される「超越論的方法論」の理念について検討する（第二章）。しかし、これらの先行研究は必ずしもフッサール最晩年の思想内容を全面的に汲み尽くすものではない。

超越論的現象学の「超越論性」を維持しつつ、自我論的基礎づけから開放することを目指したスタインボックの研究は「故郷／異郷」という共に基づけ合う相互主観的構造へ定位することにより「現象学の最も具体的な次元」とも言える意味の「世代発生」的連関を取り扱う視座を提供した点で十分に評価されるべきである。しかしその反面「世代発生的現象学」はまるで現象学の最も究極的な方法であるかのような装いをもって導入されながらも、結局のところ分析全体は「内世界的」な水準に留まり「超越論性」の概念が曖昧なものとなる点は批判を免れ得ない。更にフッサールが関心を寄せた「生の繁殖」の側面を「故郷／異郷」における「意味の伝播」過程へと一元化することにより、超越論的エゴそのものの「始まり」と「終わり」をめぐる究極的な形而上学的問いが遮断される。総じて言えば、彼の研究は「世代」をめぐるフッサール最晩年の思索を展開させることを急ぐあまり、同時期に取り組まれたもう一つの重要な問題系を看過したものと言わねばなるまい。

それこそ第二章で取り上げる「現象学の自己批判」、即ち自然的認識の超越論的批判として遂行される現象学的思惟全体を改めて批判的に吟味するという課題に他ならない。しかしフィンクの「超越論的方法論」もフッサール自身が構想した「自己批判」とは根本的に対立する要素を含むものとして成立した。フィンクは構成過程の終極点としての世界へ向かう「超越論的に構成する自我」と、世界から身を翻し「無関与の傍観者」的態度をとる「超越論的に現象学する自我」との存在様式における差異に注目し、弁証法的な図式に即して「人間自我」を媒介とした三自我の同一性を論証した。即ち「現象学する自我」は「構成する自我」の自己構成に受動的な仕方で随伴する「非本来的、第二次的な世界化」を通じて、ただ「見かけの上」でのみ「人間」として世界内に「現出」する。こうした解釈に対して、フッサールは「構成する自我」と「現象学する自我」との対比が余りに強調され過ぎであると反論し「現象学する自我」は単に「見かけの上」でのみ「人間」なのではなく、むしろ自然的素朴性から解放された「より高次の人間」であると主張した。

本研究では、新旧二人の現象学者による先行研究を批判的に解釈した上で、改めてフッサール自身による「世代発生的問題」の解明、並びに「現象学の自己批判」の内実を明らかにする。この中で差し当たりは独立したものとして取り扱われ得る二つの問題系は密接な連関を形成し、その解明は伝統的な意味での形而上学を排斥したフッサールが最晩年に直面した「原事実」をめぐる「現象学的形而上学」の次元で果たされる（第三章）。

中国新出土文献の思想史的研究

草野友子

本研究は、二十世紀後半に中国において出土した「新出土文献」の解読を通して、中国古代思想史を見直し、新たな中国古代思想史の記述を目指すものである。

郭店楚墓竹簡（郭店楚簡）・上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）は、戦国中期以前の思想史の空白を埋める、極めて重要な竹簡資料である。従来の研究では、既存の伝世文献から思想を読み解くしかなかったが、これらの竹簡資料から思想を読み解くことで、伝世文献とは異なる解釈を提出したり、これまでの研究では得られなかった思想を解明できるようになった。そこで、まず「序」において、郭店楚簡と上博楚簡の概要を紹介し、「形制一覧表」と「用語解説」とを附した。

第一部「新出土文献研究概述」では、新出土文献の発見が従来の中国思想史研究にどのような影響を与えたかについて概説し、二〇〇八年までの国内外での研究状況とその問題点、及び研究方法・研究課題を提示した。

第二部から第四部は、上博楚簡中の五文献を取り上げ、文献毎の個別検討を行った。その際、はじめに各文献の釈読を掲載し、その後に内容の検討に入っている。

第二部「上博楚簡『魯邦大旱』『柬大王泊旱』の研究」では、共に旱魃が主題となっている『魯邦大旱』『柬大王泊旱』を取り上げる。『魯邦大旱』は、春秋時代に魯を襲った大旱魃に際しての、哀公と孔子、及び孔子と子貢との問答を記した文献であり、『柬大王泊旱』は、楚の簡王の時代に起こった大旱魃の際の事柄を記す楚の在地性文献である。これら二篇においては、旱魃の原因は君主の失政にあるとされ、旱魃を単なる自然災害ではなく、上天・上帝からの懲罰と考えている。そして、君主が正しく政治を行えば、旱魃は治まるとされる。すなわち、これら二篇は天人相関思想が窺える文献であり、伝世文献の旱魃記事との比較を通して、その思想的特質を明らかにしている。

第三部「上博楚簡『競建内之』『鮑叔牙与隰朋之諫』の研究」では、『競建内之』『鮑叔牙与隰朋之諫』を取り上げ、両篇の関係とその思想的特質について考察する。まず、両篇が別篇なのか、同一篇なのかという問題について、篇題、竹簡の形制・字体・書法、内容面の三つの角度から分析を行い、同一篇と見なせることを明らかにした。本文献は、斉に日食が発生した際、鮑叔牙・隰朋の二大夫が斉の桓公を諫めるという内容であり、日食を媒介とした典型的な天人相関思想が見られる。そして、その思想的特質

は、日食が天からの一方的な譴責であることを強調する『書経』『詩経』、日食の発生を分野説で説明する『左伝』、天の警告を二段階に分けて説く漢代の災異説などとは性格を異にし、人為の是非・反省・改善という点に主眼を置く『管子』と最も類似することが明らかとなった。さらに、『管子』の類似文との相違点を検討した結果、本文献は為政者に向けて著作されたものであることや、鮑叔牙・隰朋を顕彰しようとする意図があることを指摘した。そして最後に、本文献の篇名を「鮑叔牙与隰朋之諫」に統一すべきであると提言している。

第四部「上博楚簡『姑成家父』の研究」では、春秋中期の晋国の三郤（郤錡・郤犨・郤至）が登場する『姑成家父』を取り上げる。本文献は、『左伝』『国語』などの類話との相違点が注目される。まず、竹簡排列案を検討し、続いて読解のポイントとなる「百豫」について考察する。その結果、「百豫」が夷狄集団「白狄」を指すと考えられること、第三簡の欠損部分には「百豫従」の三字を補うべきであることを提言した。それを踏まえ、『姑成家父』と『左伝』『国語』とを比較し、『姑成家父』の文献的性格と著作意図とを明らかにした。『姑成家父』と『左伝』『国語』とは、話の大枠は類似しているものの、異なる点が数多くある。伝世文献における三郤は、その悪態ぶりが強調されているが、『姑成家父』では、三郤、中でも姑成家父（郤犨）が臣下の立場をわきまえた実直な人物として描かれている。『姑成家父』は、おそらく郤犨を高く評価する立場の人物によって書かれたものであり、三郤の再評価を促す一資料であると推測される。

以上の検討を行った上で、「結語」において本研究から導き出した結果を総括し、本研究が中国思想史研究にとっていかなる意義があるのかについて論じている。

開業助産婦を通してみる出産文化の変容

―「自然」と「医療」の間で―

伊賀　みどり

この論文は、おもに昭和初期以降の出産文化の変容過程を、開業助産師に関する文献資料の分析およびライフヒストリー・インタビューという方法で研究したものである。先行研究では、近代医療に基づく方法によって出産文化を大きく変えた助産師像がおもに描かれた。一方、一九八〇年代以降に多数出版された開業助産師の自伝・伝記には、「自然」出産を目指す助産師像が描かれている。そこで、開業助産師はいつ頃から「自然」を目指すようになったのか、「自然」の内容とはいかなるものか、そしてどのような「医療」を用いたのか、という点に注目して開業助産師に

関する研究を行った。

論文は二部構成である。第一部（第一章～第五章）は文献資料の分析である。助産師のための教科書および雑誌、助産院で出産した女性たちが書いた感想、そして婦人雑誌などの文献資料をもとに、助産師の制度や業務内容および出産介助や授乳指導の変容過程を考察した。第二部（第六章～第九章）はライフヒストリー研究である。私は、関西地方の都市部で活動した（している）、年齢や経歴の異なる五人の開業助産師に対してライフヒストリー・インタビューを行い、それぞれのライフヒストリーをまとめた。

この論文で明らかになったことは以下の通りである。まず、「産婆規則」（一八九九年）や「助産婦規則」（一九四七年）に基づく免許（以下、「旧免許」と記す）を持つ助産師と、「保健婦助産婦看護婦法」（一九四八年）に基づく免許（看護師免許が必要。以下「新免許」と記す）を持つ助産師とでは、開業の経緯、業務内容、医師との提携関係が異なることである。次に、助産師はもともと「自然」出産を目指していたわけではなく、一九七〇年代末頃からの「自然」出産の流行のなかで、病院や診療所における医療介入の多い出産に疑問を抱き、「自然」出産を目指すようになった、ということである。

まず、自宅出産の時代に活躍した「旧免許」の助産師は、医師の世話にならずに無事に出産介助することを重視し、時には会陰切開や陣痛促進剤の投与などの医療行為も行ったのであり、決して「自然」出産を目指したわけではなかった。一方、「新免許」の開業助産師は、一九七〇年代末以降の「自然」出産の流行のなかで、勤めていた病院や診療所における医療介入の多い出産に疑問を抱き、「自然」出産を目指して開業した。また、同じ頃に、「旧免許」の開業助産師の一部も、「自然」出産を目指すようになった。だが、それぞれの開業助産師が目指す「自然」の内容は異なる。「自然」とは「不自然」なものに対する対抗言説であり、対抗するものに応じて「自然」の内容は変わるからである。

このほか、「旧免許」の助産師は、母乳育児の支援に必ずしも熱心ではなく、乳房マッサージ（乳揉み）もあん摩・マッサージ師や「乳揉みさん」などと呼ばれる専門家（男女）に担当させることが一般的であったこと、そして、母乳育児の流行を背景に、一九八〇年代前後に乳房マッサージ（乳揉み）が助産師の専門業務の一つとして確立され、そのことが助産師のアイデンティティの再構築にも役立ったことも明らかになった。また、「旧免許」の助産師は、人工妊娠中絶が非合法の時代には望まれずに生まれた子どもを預かり、子どもを欲しい親に斡旋したり、優生保護法の制定後には助産院で産科医が人工妊娠中絶（掻爬手術）を行うなど、望まない妊娠や出産にも深く関わってきたことも明らかに

なった。

この論文の最大の功績は、インタビューを重ね、年齢や経歴の異なる五人の開業助産師のライフヒストリーを詳細に記録したことだと考える。

近現代日本女性服装論

― 性差の規範性が彩る「女らしさ」と「女性美」―

小山有子

本論は近現代日本において、女性の服装がいかに性差の表象として、その機能を果たしてきたのか、また、人びとは社会においての服装をどのようにとらえていたのか、その双方向を明らかにするものである。しかし、「服装が性差を持つ」という単純な事実は服学的な服装研究において重きを置かれてこなかった。その後被服学以外の分野より「モード論」が活発化し服装論にも新しい視野が取り込まれたが、「性」「ジェンダー」について言及される一方で、男女の役割分担を固定化したまま、また、男女別の衣服アイテムにまつわる意味体形が固定化されたままの記述がなされてしまい、服装における性差について問い直すことにはならなかった。一方で女性学的なアプローチからは村上信彦による『服装の歴史』をその筆頭にあげることができるが、彼の論述は女性のキモノ・スカートからの抑圧−解放という視線からのみ描かれ、女性は常に被抑圧者として描かれている。それは結論として、女性がズボンをはくことのみが正しいものだという認識が導かれてしまう閉塞性を内包していることに他ならない。

そこで本論では、女性の服装は、男性のそれと異なる位相にあり、社会的条件に色濃く影響されるという村上服装論の問題提議を受け継ぎつつ、近現代日本において五つの服装にまつわる議論を取り上げ、女性の服装がどのように社会に認知されていたのか、それによって女性の存在そのものについてもどのように認識されていたのかに注目した。

第一の事例（二章）および第二の事例（三章）では、和服の改良をめぐる議論を検討する。明治期には「近代化」を最大目標として衛生的・合理的でない和服は改良されるべきだと論じられ、太平洋戦時下においては「非常時」としての活動性を目的とした改良論が展開された。しかし、そのどちらもが現状の和服の形態を美とみなす観点からの強い批判によって、和服の改良は小さなものにとどまることとなった。また、その議論においては、服装（あるいは衣服）について論じられるような体裁がとられながらも、その実は女性存在をどのようにするかについて論じられていたことも明らかになった。

第三の事例（四章）では現代でも人気が続く挿絵画家であり、デザイナー、雑誌編集者でもある中原淳一を取り上げた。彼は発行した雑誌において、読者にデザインを示しただけではなく道徳家としての役割も果たし、読者女性たちに「美しさ」を説いた。しかし、その「美しさ」とは従来の性別役割分業を理想化したものであった。

第四事例の五章は一九七七年に大阪大学で起こったジーパン論争である。この論争では本来議論されるはずの「女性のズボン着用」についてよりも、より重要な問題だとみなされた「教育」問題へと焦点がすりかえられ、女性だけに課された服装の約束については縮小され問題にされなくなってしまった。最後の事例（六章）では、それから三十年経ってなお、女性の服装から社会の変化（悪化）を読み取り、批判する論を取り上げた。ここで問題になっているのも女性の服装であるが、内実は女性存在そのものを批判・議論していることが明らかになった。

以上の事例からわかることは、近現代日本においては「服装はジェンダーである」と言いうるような状況にあったということだ。人びとは服装を論じながら女性存在を論じ、両者の関係は不可分であった。ただし、このような視点が被服学・女性学など領域横断的に共有され、議論が活発になされているとはいえない状況にある。本論で取り上げることのできなかった年代においても同様に、女性とその服装について社会がどのように認識しているのかという問題は、継続的に分析・検討されるべき課題である。

マイノリティを生きるということ、あるいは蝙蝠であるということ

崔　博憲

わたしたちは、自国が中心に描かれ、国境ごとに色分けされた世界地図を自然なものとして受け入れてしまっているが、それには自国中心主義、世界が国民国家によって構成されているという固定観念、国家と民族と文化が一致するという偏見が埋め込まれている。ヒト・モノ・カネ・情報の移動が増大する現在、わたしたちはその歪んだ「世界地図の中に」ますます閉じ込められつつある。わたしたちは、今まで以上に懸命に「世界地図の外に」出る途を探求しなければならない。そのために、世界地図が世界地図であることによって生み出される痛みを被る者たちの生に向き合わなければならない。本論は、そのような問題意識を基点として、マイノリティについて考察したものである。

こうした問題意識を序章で述べたうえで、一章では、マイノリティとは誰なのか、マイノリティを語ることにどのような問題と

可能性があるのかを検討し、つぎのような見解を述べた。マイノリティについて思考するとき重要なのは数ではなくその位置である。マイノリティとは規範的ではない位置を生きる者たちの名前なのである。マジョリティが規範的な位置に在るのは、本質的にその者たちが規範的だからではなく、特定の者たちを規範の外に位置づけ、マイノリティ化しているからである。マイノリティとはそのような暴力に晒されている者たちのことである。こうした構築／偽装の問題は、マイノリティを語るという問題とも連動している。安易に客観という位相を想定したり、マイノリティを十全な主体として語ることで、かれらの主体性を奪ってしまう危険がある。しかし、そうした危険性を感知しながらも、なおマイノリティに向き合い、その存在について語ることに何らかの可能性を見出すならば、偽装された客観性や領域・分野に頼らない言葉や方法を見つけなければならない。

二章では、現代の在日韓国朝鮮人というマイノリティにとっての民族や民族という括りを乗り越えることの意味などについて考察を行った。近年、在日社会の内外から民族という括りに対する違和感が表明され始めている。だが、多くの在日韓国朝鮮人たちが困難な日々を生き抜いてきたくために拠り所としていたそれを、単純に民族主義／ナショナリズムと批判することはできない。だが、「民族」を硬直的にとらえるだけでは、既存のマイノリティ―マジョリティ関係を再生産し、在日韓国朝鮮人のなかの多様な思いや生き方を抑圧してしまう。ここでは、そうした情況を踏まえつつ、戦中に親日行為を行った李光洙に触れた作品を著した李良枝と姜信子の作品などを検討しながら、国家、民族、イデオロギーの狭間で生きる在日が、そういった言葉や概念を一義的にあるいは最終的に拠り所としない生き方を探求することの可能性について検討した。

三章では、タイの山岳民族をとりあげ、国民国家化やその装置である開発とのかかわりを通してかれらのマイノリティ性について検討し、つぎのようなことを述べた。これまで山岳民族は、麻薬、森林破壊、共産主義といった諸問題を解決するために、もっとも開発されなければならない存在だとされてきたが、開発は、山岳民族の生活を実際に豊か／便利にする以上に、かれらを一方的に「内的他者」と意味づけ、タイにおける国民的同一性を強化するという役割を果たしてきた。しかし、山岳民族は、そのように暴力的に自らを他者化する開発が展開するなかで、ただ開発されるだけの存在であったわけではない。かれらは、デモを通してまっこうから国家に権利を主張したり、政府やＮＧＯや知識人の謳う開発の狭間でしたたかさを発揮して生き残ろうとしたりする主体性をもった存在でもあるのだ。

また、以上のような検討や考察以外にも、本論では、「蝙蝠」

のように「どっちつかず」である他ないマイノリティが、どっちつかずのままに生きられる可能性を拡張しなければならないということ、その拡張のためには一つの閉じられた構図を別な構図へ開く運動が必要であるということについても論じた。

素人演劇の研究
― 学校と農村から ―

畑中　小百合

本研究は、近代における素人演劇について、学校（主に小学校）と農村という二つの空間における実践とそれをとりまくイデオロギーとの相関関係を記述し、「素人」が劇（主に「新劇」）を演じることの意味を考察しようとするものである。対象とする時代は、学校と農村で素人演劇が意味づけられフォーマットが確立した一九二〇年代から一九五〇年代までとし、戦前・戦中・戦後という枠組みによって流れを捉えることを試みた。本論文は全体を第一部「学校教育と演劇」、第二部「農村と演劇」の二つにわけ、それぞれの領域を時間軸に沿って論じていくとともに、領域間の関連についても随時言及している。

第一部「学校教育と演劇」

近代教育の確立にあたって、地域社会に学校教育の必要性をアピールする役割を担ったのが学校行事である。学芸会は、父兄の前で子どもが学習成果を発表する場とされたが、その方法として「対話」「演技」が編み出され、大正時代には劇が演じられるようになる。学校劇の誕生である。劇は学芸会の花形演目となったが、派手な演出がなされるケースが増え批判される。一九二四（大正一三）年の岡田文部大臣による通称「学校劇禁止令」は、学校劇の見世物化を取り締まろうとするものであった。学校劇批判は、特に子どもを観客の視線にさらすことに向けられた。たとえば人に見られることが子どもの人格形成に影響するとした倉橋惣三は、観客との相互作用というパフォーマンスの要件を全否定することで、子どもの世界を守ろうとした。

いったん下火になった学校劇も、一九三〇年代の成城小学校による活動を中心に再び盛んになる。成城学校劇はブルジョワ的と批判もされたが、全国の教師たちに影響を及ぼした。しかし、当時の公立学校では劇を演じる場がなく、公立の教師たちは次第に学校以外に発表の場を求め、児童劇団が多く誕生した。戦時体制下においては、子どもの劇は国民文化という広い枠組みのなかで議論されたが、そこで問題化したのが、子どもの劇は人にみせる価値があるか否かという問題である。「児童の手になり、児童の所有する演劇などというものが有り得ないことは、少なくとも今

日までの児童劇の歴史が証明してゐます」(注)と言い切る演劇学者飯塚友一郎の視線は、子どもを完全なる「素人」とみなす演劇人としての視線であった。

一九五〇年代、子どもの劇が再び問題化する。児童劇団の公演に対して芸術的なクオリティが低いという批判が相次いだこと、また、子ども俳優の労働が問題化したことなどが背景にあった。やがて劇団東童など、子ども俳優を中心とした児童劇団は姿を消す。こうして、子どもが演じる劇は学校のなかに封じ込められた。一九五〇年代の学校劇は、生活綴方教育運動の影響によって日常を客観化することに焦点をあてつつ、劇の独自性を追求し、やがて「からだの発見」に至った。

第二部　農村と演劇

農村演劇は、農民が農民独自の文芸をもつことを目指した「農民派」とよばれる農民文学運動のなかで積極的に意味づけられ、福岡県の嫩葉会のような素人による「新劇」活動が次々と「発見」され賞賛されるようになった。その一端を担った飯塚友一郎は、豊富な知識と観劇経験から、演劇のもつ多様な可能性についてとらえていたが、農村の人びとが「無反省な都会文化の模倣」をすることについては批判した。一方、イデオロギーを先鋭化させた「農民派」は、その思想をセリフにし、言葉によって伝達する形式の「新劇」を推奨し、思想的戦闘体制を強要した。

戦時体制下、素人演劇運動は、日本の国力増強のための文化政策として位置づけられたが、そこで推進されたのは「新劇」であった。旅廻り一座や歌舞伎など多様な芸の影響下で演じられる素人演劇は、「健全」「不健全」といった評価を与えられた。戦時体制下において「新劇」が組織的に地方へともちこまれたことが、逆に人びとの身体に根ざす雑多な芝居の影響を浮かび上がらせることになったのである。

戦後まもなく、日本全国で素人演芸大会が流行する。そこで最も多く上演されたのが「やくざ芝居」であった。しかし、「やくざ芝居」に込められた「封建的イデオロギー」をプロの演劇人は徹底的に批判する。一九五二年から開催された全国青年大会演劇会は、「新劇」を是とする一貫したヒエラルキーのもとに青年団演劇を評価するものであったが、出場した青年団のなかには、コンクールで演じたものは人気がないので、村で上演するときには「やくざ芝居」を演じるという声がきかれた。日常に組み込まれる農村演劇は、先鋭的なメッセージをもつものよりも、親しみやすく、世代を越えて支持される「ムード」をもつものが求められたといえよう。

注

飯塚友一郎『国民演劇と農村演劇』清水書房、一九四一、一五〇頁。

複数形の歴史に向けて

― 戦後日本の思想空間における歴史記述と実践をめぐる葛藤 ―

花森重行

本論文は、戦後日本の思想空間における歴史記述と実践との関係を、武田泰淳・堀田善衛・竹内好・藤田省三・梅棹忠夫・上原専祿という六人の思想家・文学者のテクストの分析を通じて再検討することを目指したものである。

一九九〇年代以降急速に進展した戦後思想史研究は、小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』（新曜社、二〇〇二年）によって初めて通史的な像を獲得することとなったが、それは戦後思想を国民主義的なものと断定した上で、国民思想史の形式の中に戦後思想を押し込めるものであった。小熊への批判も多く出されたが、結局は戦後思想とは国民主義的で再読する価値のない歴史的存在であるという点を追認することで終ってしまっている。同時にこれら先行研究は、戦後思想とは国民主義的な戦後社会の性質に規定されたものであるという社会還元論的な視点に基づいているため、七〇年代以降のテクスト論が達成してきた思想やテクスト自体の自律性の視点が欠落していた。

このような研究状況に対して本論文では、敗戦後の社会変容に対する様々な異和を含み込んだ葛藤の空間そのものを戦後思想として定義した。その上で歴史記述と実践という問題に焦点を絞りつつ、両者の複雑な関係性を明らかにすることで、記述と実践、思想と社会との多元決定的な関係性を明らかにすることを目指した。以下、各章の内容を述べることとする。

第一章第二章においては、「歴史と文学」という問題系を敗戦直後の空間に再定置することで、社会のことを描く歴史叙述と人間のことを描く文学の比較という『昭和史』論争以降に生まれた定式とは異なる、歴史と文学との様々なつながりを明らかにした。第一章では武田泰淳、第二章では堀田善衛という文学者の現代史記述を中心として、絶えず動き続ける現実のなかで歴史を書く試みが、どのように実践と結びつき、実践という概念自体を変容させていったのかを明らかにすることとなった。

第三章では、国民文学論の提唱者として著名な中国文学者竹内好の歴史概念の分析を通じて、静態的な側面が強調されがちな歴史を記述するという行為が、歴史を創るということと有機的に結びつくものであったことを示した

第四章では、思想史家藤田省三の思想的歩みを通じて、戦後の思想空間における歴史記述と政治との関係性について考察を行

なった。特にここでは五五年以降の師丸山眞男それに谷川雁との論争を通じて、藤田が歴史記述の自律性を獲得し、新たな社会への介入の方法を探していったのかを明らかとした。

第五章では、人類学者梅棹忠夫の「アマチュア思想家宣言」を手がかりとして、「文明の生態史観序説」に代表される歴史像の構築の意味を再検討した。梅棹の議論がアマチュアによる歴史記述行為である生活記録運動などを前提としていたことを明らかにすることで、戦後の思想空間における歴史への問いが専門家に限られたものでなかったことを示すとともに、そうした問いが高度経済成長下での変容の様を探ることとなった。

第六章では、世界史研究で著名な歴史学者上原専祿の歴史概念の変遷を中心として、歴史記述がどのように社会へと開かれていくのかと言うことを明らかとした。社会への積極的な関わりを持ち代表的な戦後知識人であった上原は、妻の死を転機として社会との関わりを極小化していくこととなる。だがそれは、上原の歴史記述の社会への批評性を減退させるものではなく、「死者」と「生者」とが共生する構造として歴史空間を再定義し、歴史記述と実践との新たな関係性を生み出すことへとつながっていった。

以上のような様々な思想家・文学者の歴史への問いの多様性は、国民思想史的で社会還元論的な通史への批判であったといえる。こうした戦後の思想空間における歴史への問いの多様性を明らかにしたことが、本論文の最大の成果であった。

中世の神社体制と宗廟宇佐宮

田村正孝

本論文は、中世社会において神社が果たした固有の役割を解明することを目的として、神社体制の歴史的・構造的特質を追究したものである。

一九七五年に黒田俊雄氏が提起した顕密体制論の登場によって、国家と仏教の関係論は飛躍的に進展した。一方で、中世宗教のもう一翼を担った神社をめぐる研究は、著しく立ち遅れた。しかし、中世において神仏が密接な関係を持っていたことからすれば、神社研究を欠いた宗教政策論は大きな欠落を抱えているといえよう。近年、井上寛司氏らが精力的に「王城鎮守二十二社・諸国一宮制」研究を進めたことにより神社史は大前進した。とはいえ、その本格的な研究は緒に就いたばかりで、未だ多くの課題を残している。本論文では、豊前国宇佐宮などを素材として、①国家と神社、②神社と地域、の関係を検討しながら、研究状況の克服を試みた。

これまで中世国家による神社編成は二十二社・一宮を軸に議論

が深められてきたが、この枠組みでは皇祖神を祀る伊勢神宮・宇佐宮・石清水八幡宮の性格を適切に捉えることができない。そこで第一章「中世宗廟制の成立と宇佐宮」では、中世神社体制の中核に「宗廟制」を位置づけ、宗廟の成立過程とその特質を明らかにした。十一世紀前半、宇佐宮で起きた突発的な事件を契機として「宗廟」が登場した。その後院政期にかけて、朝廷は伊勢・石清水も宗廟とし、朝廷儀式・宗廟造営などにおいて、それらに特権を付与し制度化していった。宗廟は全国数多ある神社のなかで王権と最も強い関係を取り結び、王土守護・王権守護の中心的な役割を担うようになっていた。

つぎに、宇佐宮や諏訪社などの歴史的変遷を研究するなかで、それらの神社に性格変化が起きていたことを解明した。この実態を明らかにすることによって、これまで十分でなかった鎌倉期から室町期における神社史の充実を試みた。

第二章「中世宇佐宮の変容　―宗廟から一宮へ―」では、宗廟宇佐宮の変質を検討した。宇佐宮は、南北朝内乱を経る過程で朝廷との関係が断絶したことにより、宗廟の性格を失っていった。これと同時に、九州一円に及んだ宇佐宮の宗教的基盤が縮小し、室町期には実質的に「豊前国一宮」として機能するようになった。つまり、宇佐宮は「宗廟」から「豊前国一宮」へと性格が変容したのである。

第三章「室町期における宇佐宮の祭祀・造営再興」では、応永二十五年（一四一八）から実施された宇佐宮の祭祀・造営再興を個別に検討した。

第四章「中世における和泉五社の展開」では、和泉国の神社体制が、モンゴル襲来後に、一宮大鳥社から五社惣社を中核とする体制に再編されたことを明らかにし、国内神祇秩序の構造的特質とその変容を論じた。

第五章「中世後期における信濃国一宮諏訪社と地域」では、室町期から戦国期にかけて生じた神社の性格変化を扱った。室町期の信濃国では政治的統合はほとんど実現されず、地域社会は分裂の様相を呈していたが、このようななか諏訪社は頭役祭祀や造営を通じて一国統合の機能を果たしていた。それが、武田氏の信濃侵攻とその後の諏訪社と武田氏の一体化によって、諏訪社の性格は変容し、それまで保持していた統合機能が崩壊した。

以上のように、本論文は井上寛司氏らが推進してきた中世神社史研究を批判的に継承しながら、中世神社体制の歴史的・構造的特質を明らかにし、宗教史が抱える課題を克服しようとしたものである。

南北朝・室町期公武関係の基本構造

松永和浩

南北朝～室町期の公武関係史の基本的枠組を示したのは、佐藤進一「室町幕府論」[一九六三]である。すなわち、南北朝期になると、これまで朝廷が保持してきた国家的諸権限を幕府が段階的に吸収し、幕府の王権が確立するというものである。先行研究が公武関係論の基軸に権限・覇権争奪を据えた結果、①「権限吸収」という現象が生じた原因や政治的・社会的背景の究明、②「権限吸収」が完了し幕府の王権が確立した義満期に対する、それ以前の段階固有の歴史的位置づけ、③国家・社会といった全体構造や全社会的規模で展開・深化した南北朝内乱における公武関係の位置づけに課題を残した。簡潔に言えば、議論の射程が公武二者間で完結し、南北朝期公武関係を取り巻く外在的要素、特に内乱状況を組み込めていない点に問題がある。

したがって、内乱状況に即して公武間に生起する様々な事象を捉え直し、公武関係の実態的・動態的把握を目指した。そこで、南北朝・室町期公武関係は室町将軍・室町殿の政治的要請・課題によって規定・展開していくものとの仮説を立て、公武関係を根底のところで規定する要素を探り出すことにより、公武関係の基本構造を提示することを試みた。

その方法として、①「幕府による王朝権力吸収」と呼ばれる現象が生じる理由・内実、②「王朝権力の観念的部分の吸収」とされる足利義満の「公家化」の意義、③足利将軍・室町殿の登場による公家社会の変容について、内乱との関わりから解明を試みた。この作業を通じ、幕府の軍事・政治、全国支配にとっての天皇・朝廷の役割を究明し、公武関係の国家的・社会的位置を明らかにし、公武関係の構造を立体的に把握する。素材として、公武関係に内乱状況が直截に反映する朝廷儀礼と、公家社会の求心構造を取り上げた。

荘園制を共通の経済基盤として競合する朝廷儀礼（朝儀）と戦争の費用調達の関係から、「幕府による段銭（荘園への課税）徴収権の吸収」とされる現象の内実を解明した（第一章）。その前提として、従来は専ら荘園政策として分析されてきた半済令を、戦況との関わりから新たに読み直した（第二章）。京都争奪戦などで対立する南北両朝が、公家を取り込み朝儀その他に動員するため厳密化した賞罰に注目し、「公家領安堵権の吸収」とされる現象の内実、すなわち義満を中核とする公家社会の求心構造の形成過程を解明した（第三・四章）。「王朝権力の観念的部分の吸収」とされる「公家化」についても、公家・武家を取り巻く状

況に注視し、その意義と室町殿を中核とする求心構造形成との関連性を解明した。その際、朝儀の空間構造分析を用いた（第四章）。それらを通じ、公家社会がいかに変容したかを検討した（第五章）。

以上から、次のように結論づけた。「幕府による王朝権力吸収」という現象は、①南北朝内乱での勝利、②内乱を経て成長した守護の勢力抑制という、室町殿が直面する政治課題に対処するなかで生じたものである。つまり、この現象をもたらした最大の要因は、南北朝内乱であった。室町期公武関係は朝廷・幕府間の覇権争奪として自律的に展開したのではなく、①南北朝内乱、②幕府―守護体制という外在的要素に基本的には規定される構造であった。

西ドイツＡＰＯ運動期の「対抗的公共圏」（Gegenöffentlichkeit）の形成
―ハンブルクＳＤＳによる一九六〇年代の広報活動を中心に―

田中晶子

一九六〇年代末に西ドイツで展開されたＡＰＯ（議会外反対運動）では、アクセル・シュプリンガー出版社をはじめとする既存のマスメディアに代わる新しいメディア・言論空間―「対抗的公共圏」―の創出が主要な目標のひとつとして掲げられ、街頭でのデモやハプニング、ティーチ・インなどの抗議行動の実施やシュプリンガー系の日刊紙に代わる新聞（「反ビルト新聞」）の作成など、さまざまな試みがおこなわれた。

「対抗的公共圏」をめぐる従来の研究の関心は、思想史的な方法論による公共圏概念の分析と、メディア論・ジャーナリズム学の領域における作成されたメディアの類型分類にあった。そのため、ＡＰＯ期の「対抗的公共圏」は、既存のマスメディアの影響を払拭できない、街頭での集団的な示威行動を中心とした過渡的で未熟な存在とみなされ、一九七〇年代後半の「新しい社会運動」期に確立するオールタナティヴ・メディアの単なる前史として位置づけられがちであった。

本論の目的は、一九六六―一九七〇年間にＡＰＯによって試みられた「対抗的公共圏」を、ＳＤＳ（ドイツ社会主義学生同盟）をはじめとするハンブルク地域のＡＰＯ組織の宣伝活動を対象として分析することで、ＡＰＯの具体的な展開のなかに位置づけ、同時代の社会史的な文脈のなかで考察することにある。具体的には、①ＡＰＯの展開にともない、「対抗的公共圏」の主導的なメディアの構成・宣伝活動の目的が変化してゆく過程をあとづけ、②「世代」意識を軸としたＡＰＯと同時代の青少年文化との相互

浸透をつうじた対抗性の形成がみられたことを示したい。また、ハンブルクのＡＰＯを研究対象とすることで、これまで西ベルリンとフランクフルトに集中してきた研究史の地域的な偏りを補いたい。

一九四六年の創設から一九六〇年代前半まで、ハンブルクＳＤＳの「公共圏問題」についての取り組みは、あくまで理論的な受容にとどまり、実際の宣伝活動に反映されることはなかった。

一九六七年六月二日のオーネゾルク射殺事件を契機として、ハンブルクのＡＰＯは、大学内の読者・聴衆を対象とした小規模な啓蒙キャンペーンや学生新聞の制作から、市街地でのハンブルク市民を対象とした大規模な示威行動を中心とする宣伝活動へと転換する。この「路上の対抗的公共圏」の拡大にともない、ＳＤＳをはじめとする新左翼の政治運動と青少年の対抗文化運動の間で、人的・文化的な相互浸透が見られるようになる。

両者の融合を可能にしたのは、一九六〇年代初頭より社会階層を横断するかたちで形成された青少年文化の共有による世代意識の高揚であり、思想史的には反権威主義段階のメディア観に大きな影響を与えたフランクフルト学派の批判理論の受容であった。とりわけ、抗議行動における直接性の強調と社会変革における個人の心理的次元での変革を重視するマルクーゼの思想は、創意に富んだ新しい抗議形式の実験をもたらし、青少年の対抗文化運動から「対抗的公共圏」への参加を促すことになったと考えられる。

このような反権威主義段階の「対抗的公共圏」のありかたは、連邦議会で非常事態法案が可決された一九六八年六月以降、ＡＰＯの細分化とイデオロギー的な分裂が進むとともに変化してゆく。ハンブルクＳＤＳ内部では反権威主義派が主導権を失い、それにかわってＫグループと総称される共産主義グループが台頭する。ＡＰＯ解体期のハンブルク地域の「対抗的公共圏」は、地域的なＡＰＯのコミュニケーションの回復をめざす反権威主義派と、それを否定し、規律化されたデモと党組織をモデルとした組織形態への改変を唱え、旧来の労働運動の象徴体系の復活を目指すＫグループとの対立に引き裂かれた。その結果、反権威主義段階に見られたマスメディアを媒介とした同時代の青少年文化との接点は、次第に失われてゆく。

一九七〇年にＡＰＯが終息したのちも、一九七〇年代前半のハンブルク地域ではＫグループが社会運動と青少年の対抗文化の主導権を握ることになった。そして、Ｋグループの「対抗的公共圏」に反発する初期のオールタナティヴ運動のなかから、社会運動と報道の日常性を重視し、相互の水平的なコミュニケーションを志向するオールタナティヴ・メディアの特徴が次第に形成されてゆくのである。

近・現代の大阪市におけるごみ排出・管理の時空間変動

波江彰彦

本研究は、近代以降の大阪市におけるごみの排出と管理が現在までにみせてきた時空間的な変動を追究したものである。本研究は以下に記す六章で構成される。

Ⅰ章「序論―廃棄物問題に関する研究の成果と課題―」は総説である。廃棄物問題について概観した後、廃棄物問題に関する先行研究の成果を展望し、それらに残されている問題点や研究課題を指摘した。そして、これをふまえて本研究で重視する視点や研究目的を提示した。

Ⅱ章「大都市の比較からみた大阪市におけるごみ排出・管理の特徴」では、日本全国と七大都市のごみ排出量やごみ処理内容、そしてそれらに影響するいくつかの指標を比較検討し、大都市におけるごみ排出・管理が有している一般性と固有性について整理した。また、この作業を通じて、七大都市のなかでの大阪市の位置づけや大阪市のごみ排出・管理にみられる特徴を明らかにした。

Ⅲ章「ごみ排出量に関する新たな分析手法―ＰＬＳ回帰の有用性と課題―」では、ごみの発生・排出局面に関する分析に援用する新たな手法としてＰＬＳ回帰（ＰＬＳＲ）を提示した。ごみの排出に影響する要因・施策について追究する先行研究が採用してきた重回帰（ＭＬＲ）などの分析手法には制約があり、そのことが分析結果に影響していた。そこでこの章では、特にＭＬＲに代わる手法として、ＰＬＳＲをごみ排出の影響要因を追究する分析に適用することの有用性と課題について検討することを目的とした。また、本研究の全体構成のなかで、この章はⅣ章で行う分析の方法論を示すという意味合いも有している。

Ⅳ章「大阪市における家庭系ごみ排出の空間構造とその時間変動」では、主に一九八〇～二〇〇〇年度の五時点について、大阪市における一人当たり家庭系ごみ排出量の地域差に関する分析を行った。ＰＬＳＲを用いて一人当たり家庭系ごみ排出量に影響する要因を推定し、また、それらの要因の相互作用によって形成されるごみ排出にかかわる地域性と一人当たり家庭系ごみ排出量との関係を分析した。さらに、この関係をもとに各時点における家庭系ごみ排出の空間構造を明らかにし、時点間比較を行うことによってその時間変動を追究した。

Ⅴ章「近・現代におけるごみ管理システムの発展と変容」では、大阪市におけるごみの処理・処分局面に着目し、近代以降のごみ管理システムの発展・変容過程について追究した。大阪市

は、狭く稠密化した市域で営まれる大量生産・大量消費の結果として排出される大量のごみに対抗するために、効率性を追求した大量一括処理方式を指向した。本研究では、①戦前のごみ管理システムの復旧と運用、②ごみの急増に伴う苦境と新たなシステムへの模索、③新システムへの転換とその確立、という三つの時期に整理して、大阪市におけるごみ管理システムの発展過程を検討した。さらに、現在の世界的な趨勢であるごみの発生抑制・リサイクルを推し進める動きのなかで、大阪市がこうした趨勢から後れをとっていることも指摘した。

そしてⅥ章「結論―本研究の成果と今後の展望―」では、本研究で得られた成果と残された問題点をまとめたうえで、それらをふまえて今後の研究について展望した。今後の展望としては、PLSRを用いた分析を応用したごみのトータルマネジメントシステム、「アーバノメトリクス（計量都市学）」と表現しうる新たな方法論への可能性、都市圏という枠組みで成り立つごみの広域的マネジメントシステム、再生資源流動などにみられるグローバル化が都市のごみ排出・管理に及ぼす影響を提示し、これらについて検討した。

辻邦生初期歴史小説の研究

岡　﨑　昌　宏

本論文は辻邦生初期の六つの小説について、七つの章にわたって考察を行ったものである。

まず序章において、先行研究における問題点を概観し、本論文の目的を示した。辻は、自身の作家活動や作品群の前提となる考えを、個別の自作の主題とともに、きわめて多くの機会に語っていた。そのため、辻の小説は常に先入観をもって読まれ、究極的には、どれもが同じような主題を描いているかのように捉えられてきた。辻研究はいわば、作者の考え（特に辻の作家活動の前提となった考え）がどの作中人物に描かれているか、という仕方で進められてきて、それは根深い問題である。そこで本論文では、先行研究とは違う考え方の下で辻の個々の小説を考察し、それらの成果から、新たな小説群の関連を見いだすことを目的とした。十分な考察を経ずに歴史小説「三部作」とされてきた三つの小説をまず考察し、さらに、それらの辻の小説群における位置を考えるため、現代小説のいくつかをも検討し、それらとの関連を探った。

第一章では『安土往還記』を考察した。「尾張の大殿」の生き方、考え方の高貴さ（＝辻の小説に共通する作中人物の高貴さ）ばかりに注目してきた先行研究とは異なり、語り手「私」からこの小説を考えることによって、「大殿」と同じ生き方をしていると考えて「宿命」と戦ってきた「私」が、最後に「崩壊」する過程を明らかにすることができた。

第二章では『天草の雅歌』を論じた。苛酷な運命に翻弄される与志とコルネリアの、運命に対する姿勢の違いを読むことで、辻作品に対する先入観にこだわり、与志がわざと事件を起こして「見苦しい」切腹をした意味を捉えようとしない研究のあり方を批判した。

第三章では『嵯峨野明月記』を考えた。三つの「声」の回想を、はじめは別々に考察することにより、従来重視されてきた嵯峨本の制作にはまったく集約されない、それぞれの考えの歩みを明らかにした。三人に共通する「宿命」の問題を中心に考察し、それぞれが異なる結論を得ていることなどを示した。

そして第四章では、前章までの考察をふまえ、『安土往還記』『天草の雅歌』『嵯峨野明月記』（「三部作」とされているもの）の関連と連続性を、運命の問題や舞台となっている時代、場所などから明らかにした。

第五章から第七章までは、辻の初期の現代小説を対象に考察を行い、歴史小説とのつながりへの展望を開くことを目的とした。

第五章では『旅の終り』をとりあげ、死という運命を意識したとき、幸福を感じることができるかという「私」の抱える問題を明らかにした。

第六章では『サラマンカの手帖から』について論じた。結局は「前から何もかも決っている」（＝運命）という考え、生き方を受け入れられず、「自分の軌道」を歩みたいと考える女と、そのように割り切ることができなかった「私」の態度の違いから、運命を問う人間の姿勢を考えた。

第七章では、辻が戦中に書いた『遠い園生』を考察した。「私」の現在の悩みと、少年時代の回想を通して得たものとを考え、少年期に育まれた性格を「運命」と捉える「私」が陥っている、「どうすることも出来ない」現状を明らかにした。「運命」を自覚した人間の生き方、という問題が、歴史小説も含めた戦後の小説群につながっていくことを指摘した。

以上の考察を通して、これらの辻の小説においては、現代小説、歴史小説を問わず、運命にまつわる問題が存在することが明らかになった。

最後の付章では、先行研究における先の問題が、どのようにうまれて現在に至っているのか、その実態を明らかにした。辻が頻繁に述べる、作家活動や作品群の前提となった考えなどを紹

介し、それらが辻の作品論に取り入れられる過程を、『安土往還記』に関する先行研究を例に検討した。作品に作者の語る理想ばかりを読もうとする研究の実態について問い直す姿勢がなければ、今後の辻研究の発展は見込めないと考えた。

安部公房作品の比較文学的研究

―ロブ＝グリエ、カフカ、リルケ、オースターとの関係から―

梅津彰人

本論では、安部公房の諸作品の中でもこれまで十分に研究がなされて来なかった後期小説群（『燃えつきた地図』以降の小説群）の理解を深めることを目指し、他の作家の作品との比較考察を行い、作者安部の問題意識とその方向性の確認も行った。

第一章では、先ず『燃えつきた地図』（一九六七）の考察を、ロブ＝グリエの小説『消しゴム』（一九五三）との対比を通して進めた。特に、両作品の結末の相違（主人公の運動の開始または停止）からは、形式主義的実験性を方法として取り入れつつも時代の流れ（都市化）に対応した新たな人間関係の模索を進める作者安部の姿が見出された。また、『箱男』（一九七三）については、（登場人物達の「書くこと」の権利の争奪戦を通して）作者の消去による作品の自律に成功していることが、ロブ＝グリエの小説『ニューヨーク革命計画』（一九七〇）との対比から確認でき、そこからは作者安部の個人の自由の追求の意識が窺えた。

第二章では、先ず安部とカフカの比較考察の先行研究における問題点に触れたうえで、『密会』（一九七七）の考察を、カフカの小説『城』（一九二二）との対比を通して行った。特に、それぞれの作品世界に欠かせない影の主人公のような登場人物の、嘘や見せかけなどの偽装に対する姿勢の違い（必要悪としての容認か全面的拒否か）からは、社会の嘘に対抗するための嘘（虚構）の有効性に賭ける安部と、孤独のなか「自己保存」のためには嘘（虚構）に頼らざるをえず苦悩するカフカという、両作者それぞれの嘘（虚構）への姿勢を窺うことができた。だが、続けて取り上げた『方舟さくら丸』（一九八四）からは、国家から離脱した世界（＝虚構）の創出、即ち「書くこと」の不可能性に悩む安部の姿が窺えた。

第三章では、先ずは安部の初期小説群についてカフカおよびリルケとの関係から考察を行い、続けて『カンガルー・ノート』（一九九一）を取り上げた。特にその結末部分からは、個人の自由の究極の状態として肯定的に捉えようとしていた無名性の獲得（『箱男』の世界）が結局は自己の無限増殖を生み出し自己閉鎖性に結びついてしまうという作者安部の認識、及び、他者との関係

を求めて創作方法を見直そうとする（それはかつて対象を直観的に見るという創作態度を教えてくれたリルケとの別れを意味する）安部の態度を読み取れた。

第四章では、安部の生前最後の発表作品である『さまざまな父』（一九九三）を取り上げ、晩年の創作に対する姿勢を改めて確かめた。作品において超能力が取り扱われるのは、安部にとっての「言語でしか創れない世界」の創出の実践であり、言語への信頼をアピールするものだが、注目すべきは、登場人物（少年の父親）が透明人間となるという点である。彼は無名性と自己閉鎖性を同時に有する存在で、それは無名性と支配欲の無限循環を示唆するものであり、しかもそうした人物に安部自身が重ねられていると考えられる点からは、自身も創作において有効な手段として無名性の可能性を見出すも、名付けの欲望という支配欲に駆り立てられて無限循環に飲み込まれてしまう存在にすぎないという安部の認識、さらには（安部にとっての書くことが無名性と不可分なものなのであれば）言語への信頼をもとに書くことそれ自体が無効であるという安部の諦念をも見て取ることができた。

第五章では、安部が一貫して携わったテーマ（自分とは何か、他者との関係の構築は可能か）に今現在取り組む作家ポール・オースターについて、小説*Travels in the Scriptorium*（二〇〇六）を取り上げてオースター文学の方向性を確認した。作品からは、初期作『鍵のかかった部屋』（一九八六）において示した自身の決意（内面的厳しさの維持、他者との関係の追求等）を再認識し初志貫徹を志すオースターの姿が読み取れ、無名性を通しての創作に（安部はそれを無効とみなすに至ったが）今なお可能性を見出していると考えられた。

俳句革新運動と造形美術の連関

― 写生論再考を軸として ―

大廣典子

本論は正岡子規による俳句革新運動を主題とし、その表現志向について考察した。初期の詩歌論から最晩年の随筆に至るまで子規のテクストをほぼ時系列順に取り上げ、写生論形成と美術界の動向との連関について検証した。

従来の写生論研究は、子規と親交のあった画家――中村不折、下村為山、浅井忠らが伝えた美術理論の影響を追究するものであった。北住敏夫氏の『写生説の研究』（一九五三年）発表以来、比較文学研究における松井貴子氏の『写生の変容』（二〇〇二年）に至るまで、西洋美術理論受容という観点から重要な業績が残されてきた。それはまず浅井忠の師であるフォンタ

ネージ（Antonio Fontanesi）による工部美術学校での講義内容に着目し、子規の写生観に与えた影響を検証する研究だった。フォンタネージから浅井、浅井から不折や為山へと伝えられた美術講義は、対象を取捨選択し、事物の位置関係や色彩の分明等に留意して画面構成をおこなうアカデミックな内容とされてきた。

ところが子規の著作において造形美術に関する言及は、明治美術会系のいわゆる洋画旧派に偏るものではない。彼が俳句革新に邁進した当時、美術界は変革期を迎えていた。フェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa）と岡倉天心による日本美術復興をはじめ、洋画界では明治二十六（一八九三）年に黒田清輝と久米桂一郎がフランスより帰国、外光派、印象派に及ぶ新しい表現が国内に齎された。一九〇〇年パリ万国博覧会に際しては、滞仏中の浅井忠がアール・ヌーヴォー等に関する情報を『ホトトギス』に寄稿した。そこで本研究は先行研究においては重視されなかったこれらの事象に目を向け、写生論の展開について考察した。

本論は全五章から成り立ち、まず第一章においては、俳句革新の原点ともいうべき思考について論じた。子規は旧来の連句形式から俳句（発句）を独立させ、「文学」としての俳句を追求した。この連俳（連句）否定論とフェノロサの講演録『美術真説』（明治十五年）を対比検討し、それぞれジャンルの統一と純化に関わる近代化の志向を認めた。連句排斥は、俳句に文学の最短形式をみるという原理的な発想を補強すると考えられる。では、いかにして俳句は、前近代の観念的な文芸から脱却して「文学」たり得るのか。この課題に絵画とは何かという問いが密接に関わるのが写生論であり、第二章以降は写生論形成と洋画界の動向とを通時的に論じた。当初より子規は句作における感覚的な初見性を重視し、この志向に絵画の「写生」技法が示唆を与えたのである。子規は積極的に美術に関心をもち、明治二十七年には中村不折と句画の共同制作を試みた。黒田清輝ら白馬会の台頭時には、森鷗外や久米桂一郎らの展評など、洋画新派に関わる言説を自説に組み入れた。とくに絵画については「感情的写生」という言葉を記して、「人が物を見て感ずる度合に従ふて画く」（「写生、写実」明治三十一年）という理念を尊重したが、この件は久米桂一郎の説く「現代の新画風」とほぼ軌を一にする。やがて子規は明治俳句の新趣味は、「中心は一点に集中せず稍放散せる傾向あり」（「俳句新派の傾向」明治三十二年）と述べ、淡泊で微妙な感覚の表出を認めていく。ここには、透視図法に基づく大作と完成度の高さを重視するアカデミックな絵画観とは相容れない価値判断が働いている。印象派登場の際には争点となったスケッチ的なものを是として、その未完結性を肯定する発言も注目すべきである。

以上のように本論の検証によって、写生論形成については中村

不折らの影響のみならず、黒田清輝ら白馬会の画風もまた深く関わったことが明らかとなった。そればかりか印象派、ジャポニスム、アール・ヌーヴォー等の情報を含めて、十九世紀末から二十世紀初頭にかけての美術界の動向が密接に関わったと考えられる。子規はその俳句革新にあたって造形美術に関わる諸言説を取捨選択、援用しながら多元的な表現を試みたのである。

Kazuo Ishiguro 研究
― 創作の原理としての〈日本〉と〈イギリス〉 ―

荘　中　孝　之

本論は、カズオ・イシグロ（一九五四―）がこれまでに発表した全長編小説といくつかの短編小説を、〈日本〉と〈イギリス〉を参照軸に考察しようとするものである。

第一章ではまず、国内でのイシグロの受容と研究の動向を追ってみる。海外ではすでに数冊のイシグロ研究書が出版されており、それらのなかで英語によるイシグロ研究には十分触れられているので、ここでは特にこれまでの日本におけるイシグロの受容と研究を整理しておく。それは第二章以降に対する導入の役割も果たすであろう。

続く第二章では、イシグロが英国文壇に登場するにあたって、自己の出自を大いに利用したのではないかということを検証してみたい。つまり彼が初期の習作的短編や長編第一作において、原爆を何らかの形で取り上げているのは、作家としての巧妙な戦略であったのではないかということを、アメリカで架空の被爆者詩人アラキ・ヤスサダという人物が捏造され、一部で物議を醸した事件を参照することで検証していく。

第三章では、イシグロが長編第一作 *A Pale View of Hills* を執筆する際に、かなり具体的に、ある日本文学作品を参考にした可能性を探ってみる。いくつかのインタビューでイシグロは、自己の創作において日本文学からの影響を否定し、むしろ西洋文学との関係を強調しているのだが、実はこのデビュー長編において、彼がたびたび違和感を示していたはずの作家、川端康成が執筆した『山の音』からの影響が濃厚に見られることを、作品間の対比を通して提示する。

次に第四章で、日本を舞台にしたイシグロの第二作 *An Artist of the Floating World* に関わる翻訳の問題を取り上げる。この作品の邦訳をめぐって、数名の作家や英文学者、翻訳者自身をも巻き込んだ論争が起こったのであるが、そこではイシグロ自身が想像した日本語を英語で書き表し、それをまた翻訳家が日本語へと変換した際に生じた、原文との齟齬が課題となった。これを考察

することはまた、日英におけるイシグロ文学の受容の違いを探索することにつながるであろう。

第五章においては、前二作と対照的にイシグロがその舞台をイギリスに設定し、一人も日本人を登場させないことで、完全に「日本色」を脱したはずの *The Remains of the Day* のなかに、あえて「日本」の影響が見られることを、谷崎潤一郎の『文章読本』や『陰翳礼讃』を参照しながら検討してみたい。イシグロの文体やテーマの設定、その他主人公の態度や倫理観、物語の進行等、作品のあらゆる要素に、谷崎が「日本的」と考えるものが投影されていることを示してみる。

第六章においては、その圧倒的な分量と、夢のように不可解な内容からして、これまでのイシグロ作品のなかで最も難解な *The Unconsoled* について、三つの観点から考察してみる。一つはイシグロ自身がブック・ツアーによって世界中を駆け巡るという状況、二つ目はインタビュー等から窺われる様々な伝記的事実、そして三つ目は本作品の設定や展開と先行作品との関係。そこからこの作品が、上記三点の必然的な帰結であったということを証明してみたい。

そして第七章では、イシグロの作品における母性憧憬を、長編第五作 *When We Were Orphans* を中心に探る。彼の作品には初期の頃から、母性への憧れと父性への嫌悪がしばしば見られるのであるが、この第五作においてそれが顕著に観察されることを、エディプス・コンプレックス理論やイシグロの伝記的事実、さらに作品の時代設定や執筆時期を考慮しながら検討する。

第八章は、イシグロの代表作の一つというべき初期短編、“A Family Supper” について、特に川端の『山の音』最終節と対比させながら考究する。この短編における場面設定や技法、イシグロのジェンダー表象、そして自殺や心中のモチーフを戦略的に用いたことの功罪が検証され、さらに彼の作家としての特筆すべき資質の一つであると考えられる、ある特定の価値観だけを支持しない態度が指摘される。

最後に第九章においては、イシグロの最新作 *Never Let Me Go* を取り上げ、フロイトのある論考を参照しながら、「オリジナル」と「複製」という作品の主題の一つを考えてみる。そこではさらに Steven Millhauser やヴァルター・ベンヤミンの「複製」に関する論考にも言及され、本作品に登場するクローンの持つ本質的な性質が探求される。

メーテルリンクと日本近代詩人の比較文学的研究

― 北原白秋と同時代を中心として ―

出口　馨

本論文は、明治大正期の日本近代詩人―北原白秋、木下杢太郎、西條八十、萩原朔太郎、大手拓次等―について、ベルギー出身の劇作家・詩人モーリス・メーテルリンクの受容と、その創作における詩的想像力の発展を検証する比較文学的研究である。

メーテルリンクの思想や作品は、欧州での流行を受けて明治中期の日本に紹介され、明治大正期の文壇に一つの流行をもたらした。その作品が多くの読者を獲得し、劇詩壇、思想、童話等多方面に影響を及ぼした理由のひとつには、ベルギー象徴主義の神秘的、瞑想的傾向が以前から日本にあった東洋的思想に近いものと感じられた背景がある。移入当初の受容の中心となった英訳本が流布していなかったため、戯曲や思想に比べて『温室』等詩篇の紹介は遅れた。しかし上田敏の積極的な翻訳紹介もあり、特にその影響下に象徴詩を学んでいた北原白秋は、メーテルリンクやベルギー象徴派に関心を抱くようになった。彼が木下杢太郎らと展開した芸術活動「パンの会」は、メーテルリンク受容と研究の場ともなり、詩誌『屋上庭園』には温室など彼等の植物空間への関心が見られる。

明治四二年夏から四三年春頃にかけての白秋詩篇（『東京景物詩』前半章、特に「心とその周囲」五篇や「瞰望」、「雑草園」等）では、自身の悩める魂と外界との葛藤が主題となり、魂の避難所としての植物空間、病院や運河といったモチーフ、シュールレアリスムの先駆を思わせる脈絡のないイメージの連続等に『温室』自由詩篇の影響が認められる。白秋はメーテルリンクが自由詩法において駆使した断片的イメージに似たものを都市の雑踏の中に見出し、それを感覚の交錯という手法によって表現したのではないか。

また、白秋はメーテルリンク作品に顕著な〈青〉の色調に早くから関心を抱き、都市生活の中の「異邦人の悲愁」を感じて共感を示しているが、青色は憧れ、憂愁、孤独、追憶、怖れなどを表現するこの時期の白秋詩における象徴的な色調となった。『思ひ出』とメーテルリンクの「火取玉」（『温室』）には、過去の記憶の想起を導く青色の光線、ガラスのモチーフといった共通点が見られる。この青色の光は『思ひ出』の中で、都市の新しい景物を彩ると共に、記憶を想起させる媒体の役割を果たし、また同じ色調で幼少期の恐怖、性の悩みなどを抱える姿を描くことによって、現在と密接につながる思い出という詩集の構造を支えてい

る。

白秋の〈青〉は萩原朔太郎の詩の中に一部継承され、そこでは青色の愁いは憂鬱へと強められる。「青猫」には大正期によく読まれた『青い鳥』に見られる、彼方にある幸福の希求を象徴する〈青〉の影響を認めることができる。「病める魂の所有者」を自称する朔太郎にとって、初期に密室に閉じこもる魂の歌を書き、その後厭世主義から脱して積極的に幸福への道を探ったメーテルリンクへの関心は、小さからぬものがあった。

一方、翻訳者でもあった西條八十は、文学活動の初期にメーテルリンクを耽読し、象徴詩法を学んでいる。特に「十五の唄」への関心は顕著で、後の彼の童話童謡活動に繋がるものとなった。また、幻想の鳥「白孔雀」に触発されて、詩の中に描いた鳥たちの姿は、その作品世界における詩魂の象徴として長きにわたって重要な意味を持ち続けた。八十は現実に隣接する幻想空間に関心を抱いて、夢と現実の境界を詩の中に表現しようとし、不可見の世界や死に対する畏怖を示した作品も遺した。

また、メーテルリンクは特に初期の作品において〈盲目〉に重要な意味を与えているが、日本の明治四十年代から大正期にかけての近代詩には、このモチーフが頻見される。露風、白秋、杢太郎、八十らが個々の関心に沿って取り入れたが、大手拓次の場合は顕著な拘りが見える。彼にとって、盲目性は既存の感覚の否定と超越へとつながり、やがて無意識による詩的言語の創造を象徴する隠喩へと発展した。メーテルリンクや神秘主義的象徴主義の中に、現代詩に繋がる道が内包されていることの一面を示すものであると言えよう。

本論で取り上げた詩人たちはほぼ同世代に生まれ、明治末期に青年期を迎え、メーテルリンク作品に触れた。その体験は、互いに影響を与え合いつつ、彼らの創作活動に一定の足跡を残したと考えられる。

文学の視座からの青木繁における美的仮象の創造

― 明治期のロマン主義受容の射程 ―

中野　久美子

本論文では、日本における近代の立ち上げの一面を、美という観点に焦点を定めて考察している。ロマン主義を象徴する西洋発の美という観念がどのように受容され、かつ変容を蒙ったのか。それは、「日本的近代」が形成されていったプロセスの一つに他ならないであろう。そのうちの一つの有様として「青木繁」の例を検証した。その方法として、蒲原有明、森鴎外、高山樗牛、北村透谷、夏目漱石ら文学に携わる周辺の人々との関連において、

青木繁の美の観念の独自性を明らかにしていった。

まず第一章「青木繁と蒲原有明」において、青木の画業のなかでロマンティシズムの最高作とされる《海の幸》を取り上げ、この画の神話画としての位置づけを明確にすることを試みた。有明は、その《海の幸》を讃える詩を書いている。青木を「蠱惑的画家」と規定した有明が、青木の〈仮象〉の世界に何を感受し、象徴詩を模索する有明の詩的言語の確立にどのような作用を及ぼしたのか、それらを分析していった。

次に第二章「青木繁と『明星』」において、青木と『明星』の関係を取り上げた。青木の活動の拠点であった美術団体「白馬会」は、西洋の文学や美術を受容しそれらを紹介した芸術総合雑誌の『明星』と深い関わりがあり、青木の最も充実した絵画制作期は、その『明星』の活動期と見事に重なり合う。『明星』の果たした役割が、神話画《わだつみのいろこの宮》へと至る青木の作家活動に、どのような影響を与えたのかを検証していった。

第三章「青木繁と鴎外・樗牛」において、明治期のハルトマン美学の受容を概観しながら、青木がなぜ〈仮象〉概念に反応して芸術創造を目指したのかを考察した。「自傳草稿」によると、青木は中学生の時、ハルトマンの「物の社會は物これを造れり、唯假象の社會のみ人これを創作し、人類のみこれを樂しむ」という言葉と出会い美術家になることを志したとしている。青木の創作の原点であるハルトマンのこの言葉の出典を検証していった。

第四章「青木繁と思想家透谷」において、青木の芸術創造の思想上の特徴を明らかにした。その青木への「追想記」の中で、有島生馬や正宗得三郎は、青木を透谷になぞらえている。北村透谷は、『文學界』の中心メンバーであり思想上の指導者であった。透谷の重要な評論からその思想の一端を捉え、実世界に対比させた〈想世界〉における透谷の思想と青木の独自の芸術観との共有点を考察していった。

そして、第五章「青木繁と夏目漱石」において、漱石が高く評価した青木の最後の神話画《わだつみのいろこの宮》を取り上げ、漱石の視点からみた青木における美の観念の独自性を考察した。美術に造詣の深い漱石は、自らも生涯に一枚「崇高な絵」を描きたいと望んでいた。その漱石が、《わだつみのいろこの宮》を品位のある画題としてとらえ強く惹かれている。漱石の《わだつみのいろこの宮》評価を、［崇高・美・天才］という「観念の連鎖」として、明治期のロマン主義受容の文脈の中で捉え直していった。

以上のように、全章において、西洋を受容した日本近代のコンテキストの中で、明治の洋画家青木繁の位置づけを明らかにした。文学の視座から青木の美的仮象の創造を探ることによって、本論の大きな主題である「美の受容と近代国家形成」の一側面を

捉えてきた。ロマン主義という近代に普遍の傾向を論じながら、青木と有明、鴎外、樗牛、透谷、漱石ら文学に携わる周辺の人々の〈仮象〉の世界を考察してきた。彼らもまた、美を自らの思想の中心に据え、文学と格闘した人々である。青木と彼らを繋ぐ接点から、日本近代において、それぞれの形で美と闘う者の姿を追うことが出来た。そして、そこにも、明治期の近代の立ち上げの「闘い」が、極めて明確に現象していることが明らかになった。

唐代音楽詩の研究

― 詩は音楽を表現しうるか ―

谷口高志

詩がその主題として、音楽を選択したとき、果してどのような作品が生み出されるのだろうか、言語表現である詩文学は、聴覚に依存し実体を持たない音楽という対象を如何に表現するのだろうか。このような問いに多くを答えてくれるのは、唐代に盛んに作られた音楽詩（音楽を主題とした詩）である。音楽文化の爛熟に伴い、唐代特に盛唐から中唐にかけて、音楽詩の数は飛躍的に増加する。それに従って、多くの詩人が音楽を表現するということに自覚的になり、音楽に対する描写がかつてないほどの深化を遂げることとなるのである。本稿ではその唐代音楽詩を研究対象とし、詩人たちによる音楽の言語化の軌跡をたどり、そこに示された音楽認識の有りようについて、前代までの音楽論や文学作品と比較しつつ総体的な考察を行った。

先ず、第一部「唐詩の音楽描写における類型表現」では、唐代音楽詩に関する基礎的な考察として、その類型表現の整理を行った。第一章「唐代音楽詩における楽器のイメージ――琴・箏・琵琶・笛――」では、楽器と音楽描写の関係に焦点をあて、各楽器の音楽描写のなかに見られる類型性について指摘した。続く第二章「「水」「風」「鳥」による音楽描写――流れる音楽と飛ぶ音楽――」においては、主題とする楽器の差異に関わらず、音楽描写のなかに共通して見られる表現について考察し、併せて詩人たちの音楽認識の底流にあったものについて論及した。

第二部・第三部では、第一部で論じた諸類型に関する考察を踏まえつつ、中唐期を代表する詩人である白居易・韓愈・李賀らの音楽詩に特に着目し、その音楽描写の新しさと、彼らの画期的な音楽認識について論じた。

第二部「音楽描写と聴覚・皮膚感覚――白居易を中心に――」では、白居易の音楽描写の特質とその意味について考察を加えた。白居易は唐代の詩人たちの中でも最も多くの音楽詩を制作しているが、その音楽描写には従来の詩人たちのそれには見られな

かった新たな表現が幾つか見られる。例えば、「珠」「刀」「冰」といった形象がそれである。白居易はそれらの形象を詩中に取り込み、その衝突音や破裂音によって音楽を自在に表そうとしており、音楽をより複雑に、人間の創意に基づいて描こうとしたことが窺える。また、彼が音楽の比喩として用いた形象「冰」には、音楽を単に聴覚的なものとして捉えるのではなく、冷覚をも刺激するものとして捉えようとする認識が示されている。彼は従来の詩人たちが殆んど着目してこなかった音楽の官能性に着目し、詩中に官能美の世界を創造した初めての詩人だったと考えられる。

第三部「音楽描写と視覚――唐詩人は音楽に何を見たか――」において問題としたのは、聴覚的な対象である音楽を、景物の姿かたちによって視覚的に捉え、一種の映像として描こうとする表現の系譜である。盛唐期から中唐期にかけての音楽詩には、音楽を映像化して捉えた表現が数多く見られる。だが、多くの場合、詩中に描かれたそれらの映像は特定の楽曲名が持つイメージをそのまま敷衍するかたちで描かれており、そこに一人の聴者としての感受性や、詩人としての創意はさほど際立ったかたちでは表れていない。音楽の映像化という表現のあり方が、詩歌のなかでより高い完成度をもって結実するのは、後世、音楽を詠った「至文」と評された、中唐の韓愈と李賀の音楽詩を待たねばならない。琴の音楽を一つの演奏藝術として捉え、あらゆる変化と抑揚を自らの内面に映像として浮かび上がらせ、描き尽くそうとした韓愈の音楽詩「聽穎師彈琴」。また音楽の根源的で神秘的な感応の力に没入し、自己の夢想を縦横に駆けめぐらせた李賀の「李憑箜篌引」。映像という視覚的イメージを媒介とした、韓愈・李賀の詩の音楽描写には、従来の伝統的な礼楽観の枠に収まりきらない、藝術としての音楽の捉え方が色濃く表れており、中国の詩人たちの音楽観、藝術観は、他ならぬ中唐期において新たな展開を迎えることとなったと考えられる。

宋詞研究
― 柳永と『草堂詩餘』 ―

藤原祐子

詞は宋代を代表する文學ジャンルである。唐代の半ば頃から作品が見えはじめ、五代から宋には一文學ジャンルとして確立し、作者數作品數ともに飛躍的に増加していく。それら作品の蓄積を承け、南宋にはいると盛んに詞選集が編まれることになった。本稿が主に取り扱う『草堂詩餘』は、先行する様々な詞集・詞話集を下敷きにして成立し、作品を主題ごとに分類して並べた、註と詞話を伴う詞選集である。同時期に成立した諸詞選集の中では最

も多く流布し讀まれたと考えられ、元から明代にかけて多様な版本が生み出されている。現存する『草堂詩餘』の版本は元・至正三年（一三四三）のものが最も古い。

本稿は凡て六つの章から成る。それぞれの梗概は以下の通りである。

第一章「柳永詞論―その物語性と表現―」。この章ではまず、『草堂詩餘』が多くその作品を収録する詞人のうちの一人である柳永をとりあげ、その詞にみえる口語と代言體の使用、切り取られた物語の「場面」とそこに展開される男女の「くどき」という特徴が、後代の戯曲文學のそれを先取りするものであることを明らかにした。

續く第二章「『草堂詩餘』の類書的性格について」では、具体的な作品・作者・注・詞話の検討を通して、『草堂詩餘』が作品とその作品に關する情報の寄せ集め、つまり一種の「早わかり」として編纂された可能性があることを論じた。これは「詞華集」というよりはむしろ「類書」的な特徴である。つまり、『草堂詩餘』は創作の際の參考書代わりに使われたテキストだったのではないか。

以上の議論を踏まえ、次の第三章「『草堂詩餘』と書會」では、『草堂詩餘』が誰によって如何に利用されたのか、という問題について考えた。宋元明の文学、特に戯曲と小説のテキストにその手掛かりを求めたところ、いくつかの實例によって、「書會の才人」と呼ばれるそれらの作者たちが『草堂詩餘』を參照しつつ作品を創作していた可能性があること、『草堂詩餘』の作品排列の一部には、書會の作品群と類似した構成が見いだせることが明らかとなった。

第四章「『草堂詩餘』と柳永」は、柳永詞の収録情況を分析することで、その編纂基準の一端を探ることを試みた。『草堂詩餘』が収録するのは、第一章で考察したような「柳永らしい」作品より、むしろ傳統的語彙や表現を用いた叙景に細やかなもの、且つ當時の士大夫層から高い評價を受けていたものばかりである。つまり、柳永の作品は士大夫的基準から鑑賞に堪えるものを中心に選ばれているのであり、とすれば『草堂詩餘』は元来士大夫層を讀者として想定し編纂されたものと考えられる。

ところが、『草堂詩餘』は明清にかけて、当の士大夫層から酷評されている。その大きな原因の一つが、別集との間にまま見られるテキストの異同にある。第五章「『草堂詩餘』はどこから来たか」では、南宋の大家辛棄疾の詞を手掛かりとし、その異同が何に由來するものであるのかを『草堂詩餘』の成立過程とも絡めて考えた。辛詞はそもそも別集二種類が異なったテキスト系統を有するが、『草堂詩餘』はその二種とはさらに異なった第三のテ

キスト系統を持つ。そこで、同時代の成立に係る詞選集『花庵詞選』とテキストの比較を行ったところ、両者はテキスト系統を共有しているという結論に到った。このことは、そのテキスト系統を當時の「詞選集」全體が共有していた可能性を示唆するだろう。

第六章「惜春の系譜」は、『草堂詩餘』が「春」に分類する作品が、他の分類に比べて極めて多いことから、發想を得たものである。中國文學が「春」を特別視したことについては既に様々な研究がなされているが、本章では特に「惜春」と呼ばれる主題が、詞だけでなく樂府や近體詩・散曲といった古典歌曲全體の世界で、如何に深まり展開されたかについて、具體的な作品の解説を通して論じた。

以上のように、本稿は『草堂詩餘』という詞選集が抱える問題から發想した諸論文によって成る。詞學研究の中で、選集は別集と同じく重要な素材であるが、これまで注目されることが少なかったように思われる。本稿が行った考察と、そこから見えてきた新たな可能性は、今後の詞學研究にとって極めて重要な意義を有するものと考える。

中古日本語の文法的な時間表現
― アスペクト、テンス、ムードをめぐって ―

黒木邦彦

本論文では、中古語の文法的な時間表現について考察した。中古語のアスペクト・テンス・ムード研究は、意味論の充実ぶりとは対照的に、形態論や統語論が貧弱である。この傾向は近年においても不変で、形態統語論的研究は依然として少ない。このような不均衡に陥らないよう、本論文では、形式と意味の両面から考察をおこなった。第二章以下の結論は次のとおりである（第一章は序論であるため除く）。

第二章：中古語のアスペクト体系においては、「―たり」の有無が文法化している。一方、「―つ」「―ぬ」の標示は文法化が進んでいない。また、「―つ」には、完成相（完了の助動詞）と近過去時制（最下位助動詞）の二種がある。

第三章：日本語の過去時制は通言語的に見ると特殊で、他言語においては、テンス以外の機能範疇が担う意味まで取り込んでいる。標準語は、過去、回想、再認

識、気づきの四者を形式上区別せず、いずれも過去時制の「―た」で標示するが、中古語は、「―き」／「―けり」でこれらを表し分ける。

第四章：中古語のトキ節は、発話時を基準として最下位助動詞を標示する（つまり、トキ節にも絶対的テンスが存在する）。また、中古語のトキ節には、同時性の諸相を反映させる文法的手段がない。

第五章：ノチ節の「―き」「―けり」は相対的テンスではない。また、ノチ節においては、過去性が完成性を含意する。

第六章：中古語においては、最下位助動詞が、テンスとムードを複合させたような機能範疇を担う。

中古語の文法的な時間表現の特徴を、日本語の時代的・地理的変種や世界の諸言語の中で相対化させると、次のように評価される。

一）日本語の文法的なアスペクト標識は、通時的・通所的に存在動詞を語彙的資源とする。活用が下二段型の「―つ」とナ変型の「―ぬ」は動態動詞に、ラ変型の「―たり」は存在動詞に由来すると考えられるが、「―つ」「―ぬ」と「―たり」を同等に扱うと、動態動詞由来の文法的なアスペクト標識が中古語に例外的に存在することに対して、合理的な説明が必要となる。本論文では、「―たり」のみを文法的なアスペクト標識と結論づけるが、このことは、先に述べた、日本語のアスペクト標識の通時的・通所的特徴とも合致する。

二）中古語の「―つ」は、意味論的にだけでなく、形態統語論的にもアスペクト（完成相）とテンス（近過去時制）を兼ねる点が注目される。たとえば、標準語の「―た」は過去と現在パーフェクトの両方を表すが、両者の間に形式上の差異は認められない。「―つ」は、「―ぬ」と同じ位置に現れるものが完成相に、最下位助動詞と同じ位置に現れるものが近過去時制に相当する。この点は、中国語（北京官話）の「了」／le／と似ている。

三）トキ節およびノチ節のアスペクト・テンス・ムード体系を踏まえると、中古語は、従属節にも絶対的テンスを標示する言語と性格づけられる。そして、従属節と母型節の時間的関係は、相対的テンスではなく、アスペクトによって表現される。ただし、完了の助動詞による標示は、必ずしも文法化されていない。

四）中古語においては、助動詞の中でも承接順位が最も低い（語基から最も遠い位置に接続する）「―き」「―けり」とム系助動詞が、同一の原理で標示される。これらは択

一的・排他的関係にあり、現実性、過去性、推量性などに基づいて、最も適当なものが一つだけ選ばれる。最下位助動詞（「―き」「―けり」およびム系助動詞）の標示は、複数の機能範疇を同時に契機とする点で、印欧諸語に代表される、屈折語型の言語の文法範疇に通じるところがある。

五）日本語の通時的・通所的変種の多くに認められる、過去／非過去の別は、［―非現実］の下位類型として位置づけられる。テンス・ムードの根幹をなすのは、現実／非現実の別である。

六）中古語には、「―む」や「―まし」など、［＋非現実］の領域に所属する標識が、複数個存在する。中古語は、この領域を著しく発達させている点で、日本語の通時的・通所的変種の中でも、極めて特異な存在と言える。

The Poetics of Retelling: A Study of *The Faerie Queene*

（語り直しの詩学 ―『妖精の女王』の研究 ―）

足達　賀代子

エドマンド・スペンサー作『妖精の女王』（一五九〇、九六年）の物語の複雑さは、発刊直後から今日迄批評的関心の的であり続けた。『妖精の女王』は、古典の賛美詩に倣ってエリザベス一世（以下、女王）を称えることを企図したが、統一性と構成美を欠くとして同時代の非難を浴びた。近年では、主題や構造などの観点から統一性を見出す試みを経て、中世ロマンスの技法継承の観点から、また、自ら解消と改変を繰り返す物語特有の性質に鑑みてこの物語の錯綜性を説明する議論が主流となっている。だが、『妖精の女王』の物語は、これら先行研究の説明を超えた複雑さを呈している。これは、「両性具有像」の削除（第三巻末）等テキストの重大な改変の結果であると同時に、この改変をもたらした有力読者によるテキストの恣意的解釈、更にはそれを修正しようとする語り手の詩人（以下、詩人）の試みにも起因することが指摘されなければならない。

『妖精の女王』の詩人は、女王を賛美するにあたって、「（女）王の二つの身体」理論に則り、「世界の帝王である妖精女王グロリアーナ」（政治的身体の表象）及び「最も美しく徳高い貴婦人ベルフィービー」（自然的身体の表象）によって女王の公私の人格をそれぞれ讃え、「女王の理想的イメージ」を構築しようとする。

同時に、エリザベス朝のパトロネージ制度の下、『妖精の女王』の詩人はテキスト内外随所でパトロンであるローリーへの礼節を尽くし、物語中の女王像に誤りがあれば修正を乞う姿勢を示すが、『妖精の女王』に寄せたローリーの推賞詩は、この女王像修正権を行使して、ペトラルカ風恋愛の貴婦人（ミストレス）像に照らして女王像を修正せよ、と命じる。この命令は、女王とローリーの共通コードである「ポリティカル・ペトラルキズム」の貴婦人（ミストレス）として妖精女王を表出し直し、それに則した解釈をテキスト全体に及ぼそうとするものといえる。

これにより当初の「女王の理想的イメージ」は変容し、「ポリティカル・ペトラルキズム」はテキスト解釈に浸潤して幾つものエピソードの意味を改変していく。更には、「ポリティカル・ペトラルキズム」において捧持される「叶わぬ愛」の規範的理念が強力に前景化され、これに伴って、詩人が「女王の理想的イメージ」の要として掲げる「真の相愛」の理念は批判にさらされた。このため、テキスト中相愛の最も力強い象徴であった「両性具有像」は、『妖精の女王』の二度目の発刊時（一五九六年）に完全に削られ、その結果、物語は非常に複雑になった。

しかし、詩人はこうした圧力をただ甘受した訳ではない。「ポリティカル・ペトラルキズム」のコードに恭順を示すかに見えて、実は、巧みに物語を語り直すことにより、「真の相愛」の理念を再び掲げ、本来の「女王の理想的イメージ」の歪曲を修復しようとする詩人の奮戦ぶりが、後半三巻（第四、五、六巻。一五九六年）から浮かび上がってくる。冒頭で述べた、従来の議論では説明困難な物語の錯綜性は、こうした圧力による解釈の歪曲とそれを修復する詩人の語り直しを抜きにしては理解できない。

パトロネージ社会のまさに「献呈品」であった『妖精の女王』は、有力読者の恣意的解釈を受け、意味は操作され、テキストは解釈上も実際にも大きな歪曲を受けた。だが、詩人はそれを受忍しつつも、密かで巧みな語り直しにより、当初の企図を貫こうとした。彼は、古典の賛美詩に倣って、国家的栄光の象徴として公私ともに優れた理想の女王像を描出し、その栄光を不朽のものにしようとしたのである。このように、伝統的詩学を受け継ぐ者として、自らの信念にあくまで誠実であろうとした詩人の「語り直しの詩学」とそれを実践する奮闘努力を、本論はテキスト中にた

どるものである。

The German Code in Thackeray's Major Works
（サッカレーの主要作品にみられるドイツ表象の意義について）

市橋孝道

本論文は一九世紀イギリスの作家ウィリアム・メークピース・サッカレー（一八一一―一八六三）の主要作品にみられるドイツ表象の意義について考察したものである。表題に用いられる「ドイツ的暗号」（〝The German Code〟）とは、基本的に、作品内に描きこまれたドイツ関連の題材が、その内部で体系的にもち得る意義を示す。本研究では、各主要小説に潜むその「暗号」を伝記的・歴史的事実に配慮しながら読み解いた。

序章では問題設定の理由を明らかにする。同時代の作家に比べ国際経験が比較的豊かであったサッカレーは、ドイツにも精通し、その知識と体験を活かして自身の著作物に多くのドイツ的事物を描き入れた。しかし、そのような彼の役割は、これまで特に注目されてこなかったため、本論では彼の作品に込められたドイツ表象の有機的な意図を探り、目立たない〝Germanizer〟としての彼の一面に光を照射する。

第一章では『バリー・リンドン』（一八四四）を取り上げ、ドイツ舞台を巧みに利用した当時の英国紳士（ジェントルマン）に関する問題の表象を考察した。この作品は英国独特の文化的価値観をドイツという外部コンテクストに置くことにより、その実態の危うさを滑稽に描出していることを検証した。

第二章では『虚栄の市』（一八四六―四七）に描かれるドイツ場面の意義を考察した。この小説は英国社会を皮肉な筆致で描いた作品と一般的に紹介されることが多いが、創作の根源にはドイツが深く関っている。なぜなら、作品に描かれるドイツ社会「プンペルニッケル」は、社会的因習や俗物的思考に囚われがちな英国社会の特質を炙り出す要素を持ち合わせているからである。

第三章は『ペンデニス』（一八四八―五〇）にみられる教養小説の要素を解明した。この章では、本作のテクストに頻出する〝truth〟という言葉を手掛かりとし、主人公アーサーの遍歴を辿りなおして作者の〝Bildung〟観が『素質の修練』であったことを明らかにした。

第四章は『ニューカム家の人々』（一八五三―五五）における教訓性をドイツ場面から解き明かした。この作品の最終章に頻出する〝fable-land〟という言葉は、これまでこの物語に描かれる英国社会への皮肉と捉えられてきたが、本作にはドイツ旅行の挿話が組み込まれており、この部分の意義はこれまであまり深く検

討されてこなかった。本章ではまずこれに注意を払い、次に刊行当時の歴史的事実を参照して〝fable-land〟の意義を再考した。

第五章では前章で浮かび上がった教育に関する重要な教訓を念頭に『ばらと指輪』を再読した。本作の序文では以前のクリスマスブックが言及され、それに描かれた教育の現状が痛烈に皮肉られている。ここから『ばらと指輪』には従来の伝統的な英国の教育に対する強い批判が隠されており、それに対する意図が物語に潜む可能性を指摘した。

第六章は『ヘンリー・エズモンド』（一八五二）にみられる『バリー・リンドン』との特異な関係性を、両主人公の名前に潜むドイツ語から暴き出し、ドイツ場面での彼らの言動においてそれを検証した。

第七章は『ヴァージニアの人々』（一八五七―五九）を取り上げ、本作で濃厚に描出される英国の姿が、刊行当時英国で最盛期にあったドイツ文化を採り入れる動き〝Germanism〟に対する著者の反応の一つとして読解可能である点を検証した。

結論では本論で取り扱った小説群におけるドイツ的事物の役割を概観し、それらが主に英国を相対的視点から描出するための技巧の一部となり得ている点を振り返った。大英帝国として伝統的因習に囚われながら単一的価値観を築き上げていく自国に、サッカレーは自身の著作物に他の観点を投入することによって、その状態を皮肉やユーモアを交えながら巧みに炙り出した。そして黎明期より〝Germanism〟に肯定的な態度を見せていた彼も、それが同様に一つの妄信となり始めると、今度は少し距離を置き、国際的な観点から捉えた英国の国民性や素晴らしさを模索し、それを、本国を始めヨーロッパやアメリカにアピールしようとしていた可能性を読み解いた。

The Eloquent Body in Beckett's Plays: The Physicality, the Body Sensation, and the Medium

（ベケット劇における雄弁な身体――身体性、感覚、メディア）

垣口由香

本論文は、サミュエル・ベケットの演劇作品を身体性――とりわけ身体パフォーマンス、身体感覚、メディアによる身体変容――という観点から考察したものである。ベケットの舞台は病気、麻痺、盲、監禁、切断、憑依などさまざまな身体的受難を負う人々であふれているが、なぜベケットはこのような辛うじて生きている態の受難者ばかりを創出したのか、これが本論文の始まりをなす問題となった。というのも、*Waiting for Godot* の執筆

は、ベケットにとって小説三部作を書く苦しみから束の間逃れるための「気晴らし」であったのだから。*Godot* が「気晴らし」となり得た理由としては、小説にはない舞台という確固たる場とそこに確かに存在する役者の身体が考えられる。したがって、劇作を始めた当初よりベケットは演劇の身体性に対し非常に意識的であったと言える。しかし、舞台上の受難者たちが示しているように、結局は舞台も役者の身体も安息の場とはならず、身体の可能性を極限まで試す実験の場となる。先の問いに答えるために、ベケット劇の身体の語りに耳を傾け、身体が雄弁に語りかける何か――それは言葉では語ることのできない何かである――を明らかにすることが本論文の目的である。

第一章では *Godot* の身体パフォーマンスについて論じている。それは言葉と大いに矛盾するものであり、この矛盾の詳細な分析から、身体パフォーマンスが言葉では言い表せない抑圧された欲望を表象しているということを明らかにした。第二章では *Endgame* を科学に全幅の信頼を寄せる十八世紀的航海の完全なるパロディととらえ、発見と観察を行う主体とその視覚が不在の二十世紀的世界を表しているものと解釈した。次章はベケット初のラジオ劇 *All That Fall* をテキストとメディア・ラジオ両面から分析し、ラジオ劇執筆がその後のベケット演劇の方向を決定づける重要な契機となったことを証明した。*Krapp's Last Tape* を論じたのが次の第四章である。劇の推進力である舞台の中央に置かれたテープレコーダーに耳を澄まし、録音された自分自身の声を聞くこの劇は、演劇とは視覚芸術であるという前提に挑戦しており、テープレコーダーに声を録音し再生するという行為の意味を考察している。第五章は *Happy Days* を腹話術の観点から分析した。聴覚的身体を持つ主人公 Winnie は大地に埋まった身体を補うかのように、腹話術によって「声の身体」および「想像上の身体」を再生産する。その結果、観客は視覚の絶対性・安定性を奪われる。第六章では、一九七〇年代に書かれた三作品 *Not I, That Time, Footfalls* を扱い、それぞれの作品において、ベケットがいかに演劇における声の可能性を広げるために実験的手法を用い、身体と声の関係を追求したのかを論じた。最終章では、死を受け入れるある種の安堵感漂う後期作品 *Rockaby* を、コーラスの概念を導入し論じている。老女の声と彼女の録音された声が重なり合うとき、歌と踊り＝コーラスが生まれ、この共に歌うという行為によって触れ合いがもたらされる様を明らかにした。

結語として、ベケット劇の身体が語るもの、それは抑圧された欲望であり、視覚の絶対優位や演劇のコンヴェンションといった既存の概念は決して当たり前の事実ではないということである。舞台上に身体的感覚的な空間を構築することを通して、ベケットは既存のものの不安定性や人為性を示したと考える。ベケット劇

は次第に縮小し、舞台上の身体も完全性を失ってゆく。しかしそれとは逆に、声の戯れはますます豊かさを増す。ベケット劇の魅力は、身体及び身体感覚が名づけ得ぬもの、不可視のもの、そしてあるものの別の側面を雄弁に語り、それゆえ私たちの考えや存在そのものに揺さぶりをかける、そんな様々な方法にあると言える。

A Cognitive Exploration of English *Tough* Constructions and Related Phenomena

（英語の Tough 構文とその関連現象についての認知的研究）

南　佑亮

本論文は、認知言語学の立場から英語の Tough 構文の意味的側面とそれに関連する現象を分析したものである。Tough 構文とは、NP_i *be* Adjective *to*-infinitive φ_i. という抽象的形式（φ_i は NP_i が意味的にこの位置に対応することを示す）を有する文の総称である。この構文は、極めて複雑な意味構造を有している。*John is easy to please.* という文の場合、*John* は文の主語であると同時に解釈上は *please* の目的語でもありながら、文全体の機能としては、あくまでも主語 *John* の属性を複合的な述語 *easy to please* により叙述することである。本論文では、この Tough 構文をめぐって四つの問題（① to 不定詞句内に生起可能な動詞句の意味タイプは何か、②述語として生起可能な形容詞の意味タイプはどのようなもので、それらがいかなる解釈を受けるか、③ to 不定詞句内の動詞句が表す概念と形容詞が表す概念がいかに相互作用しているか、④異なる意味クラスに属する形容詞同士がいかにして同一の表層形式に結びついているのか）に取り組んだ。

第一章では、Tough 構文の意味特徴を記述し、上記四つの問題を設定したのち、本研究が立脚する認知言語学の基本概念を概略した。

第二章では、本研究の理論的前提を示した。まず、概念化者の意味構成のプロセスのうち、世界に対する背景的知識を捉えるための説明概念として領域とフレームについて述べた。次に、カテゴリーに関するプロトタイプ理論を踏まえ、Croft（二〇〇一）の根本的構文理論を概略した。

第三章の前半では、動作主性カテゴリーのプロトタイプ素性は素性間に一方向的な含意関係が存在するように規定すべきであると主張し、「意図＞制御性＞有意識」という動作主性素性階層を試験的に提案した。その上で、achievement クラスの動詞が示す動作主性の細かな区別を捉えるためにはこの素性階層を精緻

化する必要があると論じた。第三章の後半では、Speaker-based Subjectivity（以下、主観性）と Viewpoint Subjectivity（以下、主体性）という二種類の Subjectivity を概観し、Tough 構文の形容詞の意味は主観性で、to 不定詞が想起する事態は主体性で捉えられると論じた。

第四章では、achievement アスペクトを表す動詞句のうち、有意識者を主語にとるものを「成功」「失敗」という対立概念によって二つに分類し、その概念を適切に捉えるために、三章で提案した動作主性素性階層を「行為意図＞結果意図＝実現制御性＞前提制御性」と修正した。これによって、動詞句がさまざまな構文環境において解釈の強制を受ける（不）可能性が捉えられることを論じた。

第五章では、難易度を表す形容詞の Tough 構文において、to 不定詞句の動詞句が結果意図の素性を欠く場合のみ、デフォルトの「難易度」解釈から「傾向・頻度」解釈が派生すると論じ、この解釈の違いを生む形容詞と動詞句の意味的マッチング関係は、提案する動作主性素性階層を応用することで適切に記述できることを示した。最後に、当該事象の拡張事例を観察し、拡張を動機づける認知過程および別の拡張経路が抑圧される原因を、主観性・主体性の観点から説明した。

第六章では、Tough 構文のうち、五章で扱った難易度形容詞以外の意味クラスの形容詞に着目し、Tough 構文というカテゴリーの全体像を領域特定性と主観性の軸を用いて記述した。領域特定性に関しては、British National Corpus での調査結果に基づき、形容詞述語の領域特定性が共起する動詞句の種類を強く制限していること、また主観性の軸においては、「物理的知覚」、「評価態度」、「可能性モダリティ」という三つの焦点を設定し、それによって Tough 構文と、Tough 構文に類似した Pretty 構文の間の連続的なカテゴリー関係も特定できることを示した。

第七章の結論では、本研究の目的がいかに達成されたかを述べた。

日本語を第二言語とする日本語教師

― スリランカの三人の教師のケース・スタディー ―

A, Lokugamage Samanthika, K.
（アラベータ　ロクガマゲ　サマンティカ　クマーリ）

私のスリランカでの九年間の日本語教育歴の中で、いつも疑問だったのは日本語を第二言語とする教師とはどのような存在なのかということであった。当時参加していた勉強会や教師会などでは、日本語の教師としての経験の有無、またスリランカで教えた

経験の有無を問わず、常に日本語を第一言語とする教師（以下、TJL1）が日本語を第二言語とする教師（以下、TJL2）を指導したり、TJL2の日本語だけではなく、教授法に関する質問にも答えたりしていた。そのようなことを当たり前のように受け止めているTJL2もいれば、私と同じように不思議に思う人もいた。TJL1であればだれでもTJL2を指導できる存在になれるのだろうか。TJL2は常に問題のある存在として考えられているのではないかと思うようになり、私は日本語教師の仕事を続けていく自信を失いかけていた。TJL2とは何者なのか、何ができれば立派な教師として認めてもらえるのか。この経験がこの研究の出発点である。

あることばを第二言語として教えるためにはそのことばを第一言語とする話者が最も適切であり、理想的であるという考えがある。このような考えの背景には二〇世紀の前半に言語学の分野に生まれたnative speakerという概念やその定義がある。しかし、二〇世紀の後半になると、この概念そのものが問われるようになった。そして英語教育界を中心に、目標言語を第二言語とする教師をいわゆるnative speakerではない劣った存在としてではなく、独自の強みをもった存在として捉えなおそうとする大きな流れが見られるのである。

本稿では英語教育で行われている英語を第二言語とする教師の研究も考慮に入れながら、スリランカの日本語教育センターで教える三人のTJL2のケース・スタディーを通して彼らはどのような状況に置かれ、どのような実践を行い、現場ではどのようなことを経験し、TJL2である自分の立場をどのように考えているのかを探った。

データ収集の方法としてはフィールド観察とインタビューを利用した。それぞれ違う日本語教育センターで教えている三人の教師のフィールドワークを行ったが、各フィールドで一ヶ月間集中してデータを収集した。

採集したデータを記述すると、協力者のラヴィーさんとナヤナさんは今の仕事に満足していること、そして自信を持って実践を行えていることが分かった。一方もう一人の協力者であるワジラさんは教職が好きでも、今自分が置かれている状況を不満に感じており、さらにTJL2としての実力に自信をなくしていることが明らかになった。なぜラヴィーさんとナヤナさんは自信を持って実践を行えるのだろうか。大きな要因の一つは彼らが日本語のできる人として職場の人々に認められていることである。一方のワジラさんは自分が認められていないと話していた。ワジラさんの働いているRセンターではTJL1が指導者の立場に立っており、TJL1の意見のほうが認められている。

ラヴィーさんとナヤナさんが自信を持って実践ができているも

う一つの要因は彼らのTJL1との関わり方である。彼らによると日本人のスリランカに対する考え方は両国の経済状況に影響されたものであり、発展途上国のスリランカの人々の考え方や国のシステムなどの全てを変えるべきだという心理から生まれている。このようなTJL1に対して彼らは積極的に自分の意見を伝え、スリランカのことを理解してもらうようにしている。これに対してワジラさんの場合はTJL1が必然的に権力を持つ存在になっているRセンターの影響も受け、常にTJL1の意見に従うという付き合い方を持っている。

周りの人にL2ユーザーの自分がどのように見られているかということと、自分なりに持っている日本人との付き合い方が三人の授業にも影響を与えていると言えるだろう。ナヤナさんとラヴィーさんが教えている学校では決まった方針はなく、自分の学習経験、それぞれの学校の学習者のニーズ、学校のリソースなどをもとにそれぞれの学校で可能な実践を自分で決めて行っている。ワジラさんの場合、自分自身の学習経験、仕事の環境、学習者のニーズも関わっているが、彼女が受けた教師教育、職場の方針も授業に大きく影響している。しかし、その教え方ではTJL2としてのワジラさんの特徴を実践に結びつけることは非常に難しく、そのような授業をするには結局TJL1のほうが最も適切な教師になってしまい、教師としてのワジラさんの存在意義が見えなくなっているということが明らかになった。

TJL2の様々な経験を生かせる実践を可能にするには日本語教育機関、TJL2, TJL1の全てに責任がある。TJL2の持っているL2ユーザーとしての特徴を理解し、彼らをL2ユーザーとして認めることは日本語教育機関の責任である。TJL2はTJL1に手伝ってもらうことが当たり前だというような受身の立場ではなく、日本語を使う場を広げたり、日本語の学習だった時の経験や、L2ユーザーとしての経験を実践に生かせるようにしたりする必要がある。TJL1の責任はそのような経験を持ったTJL2と協力しながらそれぞれの国やその人々に合った日本語教育を考えていくことだと言える。

日本語音声言語の記述的研究
―『日本語話し言葉コーパス』による再検討―

岡田祥平

本論文は、従来の日本語音声学の研究では、「研究者の日常の観察レベル」の言及しかなされていない、いくつかの現象について、国立国語研究所・情報通信研究機構（旧通信総合研究所）・東京工業大学が共同開発した『日本語話し言葉コーパス』

(Corpus of Spontaneous Japanese, 以下、英略称ＣＳＪと表記する）を使用し、計量的に記述したうえで、考察を深めたものである。構成は、序章・第Ⅰ部・第Ⅱ部・第Ⅲ部・終章となっており、四〇〇字詰め原稿用紙七一二枚に相当する（これに、参考文献、謝辞などや図表が加わる）。

序章では、先行研究の問題点とその背景を簡単に概観した。

第Ⅰ部「理論的背景編」では、本論文の前提となる理論的背景をまとめ、本論文で取り扱う「潜在的な音声変異」現象を記述する重要性を論じた。

まず、**第一章**では、「縮約形」「音変化形」の先行研究を概観したうえで、従来の研究で「縮約形」・「（音声言語における）音変化」と呼ばれてきた現象を、言語変異現象として扱う視点を提示した。そして、現象を、①書記言語に取り入れられた音声変異出自と想定できる単語、②顕在的な音声変異、③潜在的な音声変異、④音韻レベルで観察される個人的差異・偶発的現象の四つに分類でき得ること、その四つの分類の判断には、ＣＳＪのような音声学的な分析にも耐えうるコーパスを使用した計量的な分析が有効であろうことを指摘した。さらに、言い間違いと音声変異には連続性があることを論じた。

続く**第二章**では、第一章での議論を踏まえた上で、音声変異研究では音韻論的対立という概念も導入することが必要であることを論じた。同時に、音声変異と異音の違い、語形変異と音声変異の違いについても考察した。

第Ⅱ部「『日本語話し言葉コーパス』の言語資料的性格をめぐる諸問題の検討編」では、本論文で記述の対象として取り上げたＣＳＪの言語資料的性格をめぐるいくつかの問題点について、検討を試みた。

まず、**第三章**では、ＣＳＪの言語資料的性格を検討することの必要性を述べた上で、ＣＳＪが真田信治氏や森岡健二氏のいう「標準語」（フォーマル場面で使用される日本語）のコーパスであることを作業仮説として設定する、本論文の立場を表明した。同時に、そのことにより、どのような研究が可能になるか、ＣＳＪを使用した研究の可能性についても検討した。続く**第四章**では、ＣＳＪに付与された言語学的情報の中でも音声学的情報の妥当性について検討した。さらに、**第五章**では、従来の認識ではまったく別個のものとして扱われてきた独話と対話にも連続性が認められることを論じた。このことにより、ＣＳＪが独話中心のコーパスであるが、だからといってＣＳＪの分析結果が独話にしか適用できない、というわけではないという研究の視点も提示した。

第Ⅲ部「日本語音声言語の諸相の記述再検討編」では、先行研究などで、現象の存在自体が指摘はされてきたものの、詳細な記述はなされてこなかった現象のうち、いくつかを取り上げ、CSJを使用し、計量的な側面も踏まえつつ、精緻な記述を試み、先行研究での言及の妥当性などを再検討した。

具体的には、まず**第六章**で、現代日本語の音声言語に生起するモーラの出現頻度を概観した。続く**第七章**では、現代日本語の音声言語に生起する〈促音〉化の実態を概観した。第六章・第七章では、日本語の基本的な一単位であるモーラをめぐる諸現象について、概略的な記述を試みたものである。

第八章以下では、現代日本語の音声言語の分節音をめぐる現象を取り上げた。

第八章では、無声子音が前接する境界直前の狭母音の無声化について、現象が生起する言語内的条件・言語外的条件を詳細に検討した。続く**第九章**では動詞「言う」の語幹の発音について、**第一〇章**では「雰囲気」という単語の発音について、それぞれ、発音のゆれの実態を計量的に記述すると同時に、ゆれの生起の言語内的条件・言語外的条件について詳細な検討を行った。

最後に、**終章**では、第Ⅲ部での議論を中心に本論文全体の内容を踏まえたうえで、本論文が言語研究に貢献でき得る点として、大規模音声データによる先行研究の再検討（自発発話音声の実態の記述・「標準語」音声の多様性の実態の記述・日本語音声言語における「潜在的な現象」の記述など）の可能性を見出したこと、言語現象と種々の言語内的条件・言語外的条件との相関を模索することにより変異理論への更なる深化に貢献できる可能性があり得ること、を指摘した。最後に、今後もCSJを使用した研究の発展が見込まれるが、CSJを使用した研究に必要な能力（テーマの選択力と分析と洞察力）についても論じた。

漢語形容動詞を前要素とする臨時的な複合語に関する研究

蔡　珮　菁

本論文では、〝形容動詞と（動）名詞とのむすびつき〟を対象に、その連語の形式（「A的なB」「Aな・のB」「AにBする」）と臨時的な複合語の形式（「A的B」「AB」）との使用状況を計量的に調査することによって、語構成レベルの観点から、要素「A」「B」がどのようなくみあわせのとき臨時的な複合語になりやすいかを検討した。以下、『毎日新聞』コーパスを用いて、連

語と交替可能な臨時的な複合語の成立条件に関して、明らかになったことを、順を追って記す。

第一章では、「長期的な観点」に対する「長期的観点」のように、「連語」と交替可能な「臨時的な複合語」について、その語構成レベルの成立条件を解明すべく、〝接尾辞「的」による派生形容動詞（「A的」）と名詞（「B」）とのむすびつき〟に注目して、要素「A」「B」がその語種・品詞性においてどのようなくみあわせのとき、臨時的な複合語「A的B」になりやすいかを検討した。新聞の社説本文三年分を資料とし、交替可能（自由変異的）で、シンタグマティックな臨時一語化や脱臨時一語化に無関係な「A的なB／A的B」を、規定的な係り受け関係の有無を考慮しながら調査した結果、「A的B」が最も活発に成立するのは、「A」「B」がともに二字漢語の（非用言的な）体言類というくみあわせであること、また、このくみあわせは、四字漢語複合名詞や和語複合名詞の構成において最も優勢なくみあわせに一致・対応することが明らかとなった。このことから、連語と交替可能な臨時的複合語の成立にも、既存の（固定的な）複合語の構成のあり方が影響を与えていること、すなわち、要素のくみあわせが、既存の語構成において安定的・生産的なタイプに一致・対応するものほど、臨時的な複合語として成立しやすいのではないかとの見通しを得た。

第二章では、「（接尾辞「的」をもたない）二字漢語形容動詞と二字漢語の（動）名詞とのくみあわせ」が連語であるか複合語であるか、複合語であるものはそれが恒常的か臨時的かを調べ、それぞれの形容動詞を「非複合型」、「恒常型」、「複合型」、「臨時型」に分類した。「非複合型」には、感情や主観的な評価・判断を表す形容動詞が多く、「複合型」には客観的な属性を表す度合いの強い形容動詞が多いこと、一方、「恒常型」には、「無理」と「可能」の二語しかなく、その恒常的な複合語は、古めかしい複合語か特定の分野の専門語であって、新たな語形成の「型」とはなっていないこと、さらに、「臨時型」は、客観的な属性を表す度合いが強いという点では複合型と共通しつつも、新聞テクストの中でのみ臨時に複合語化されるものと考えられること、が明らかになった。

第三章では、考察の対象を、臨時型の形容動詞の中でもとくに生産的な「正式、大量、主要、独自」の四語に限定し、それらと、連語・複合語両方の後要素になる（動）名詞とのくみあわせにおいて、臨時的な複合語の成立可能性を検討した。その結果、「主要」は、体言類（N）とのみむすびつき、ほとんどの場合、臨時的な複合語になる（わずかに、抽象的な名詞とむすびついたときに連語になることもある）。「大量」は、体言類（N）とくみあわさるとほぼ連語になり、用言類（VN）とくみあわさると

臨時的な複合語になることの方がやや多い。「独自」は、体言類（N）と用言類（VN）の両方とむすびつくが、四語の中では、もっとも臨時的な複合語になりにくい。「正式」も、同じように体言類（N）と用言類（VN）の両方とむすびつくが、制限的な修飾関係では臨時的な複合語に、非制限的な関係では連語になりやすいという傾向が観察された。すなわち、「主要」と「大量」とは、その臨時的な複合語の生産力に、後要素の品詞性（体言類（N）と用言類（VN））の違いがかかわっていること、「独自」と「正式」とは、そうした品詞性の違いよりも、より意味的なレベルでの違いがかかわっているらしいこと、とくに、「正式」では、後要素に対する修飾関係が「制限的」か「非制限的」かという違いがかかわっていることが推測された。

日本語のジェンダー規範形成の道筋

佐竹　久仁子

本論文の目的は、現代の日本語社会に強固に存在する〈女ことば／男ことば〉規範に代表されるような言語のジェンダー規範の形成、流布、受容の過程を明治期以降のメディアの言説の分析によって明らかにすることにある。

第Ⅰ部では、規範意識形成に大きな影響力をもつ初等教育の国語教科書をとりあげた。分析対象としたのは、第一期～第六期国定読本および一九九五年検定の四種の小学校国語教科書の会話文である。

戦前の国定読本の大きな目的は「標準語」の普及によって「国語の統一」を目指すというものであるが、同時に、その教材内容を通じて天皇を頂点とする家族国家観に基づく「国体」を維持するための長幼尊卑の秩序を作りあげ、忠良な兵士としての男とそれを産み育てる母としての女という国民のジェンダー化を推し進めることも意図されていた。女と男に与えられた役割は、女と男に異なることばづかいの規範を与えることによっても示された。その基本は「女のことばづかいは丁寧に」という江戸期の女訓書をひきついだ規範であり、具体的には女の常体使用の制限であった。性差は期を追うごとに強調されていき、戦時下の第五期にはことばのジェンダー規範の指導が意識的に行われた。敗戦によって国家体制が大きくかわり、「男女平等」が唱えられるようになったものの、ことばづかいの性差については問題とされることはなかった。戦前とは異なり女子が常体を用いるようになるが、それとともに戦前は採用されなかった〈女ことば〉諸形式が小説世界と同様に多様に使用されるようになり、〈女ことば〉は公教

育の領域で公認のものとなった。戦後の国語教科書は、性差形式を使用したことばづかいをインフォーマルなことばづかいの標準として提示してきたのである。

第Ⅱ部では、明治期の若年者向け雑誌、一九四〇年代のラジオドラマ、近年のこども向けテレビアニメをとりあげ、女の言語使用と男の言語使用とを峻別し非対称的に差異化する言説が大衆的メディアにおいて広範に流布され受容されていく様相を検証した。

新聞や雑誌などの大衆的な書きことばメディアでは、性別化された〈女ことば／男ことば〉諸形式が一九〇〇年前後から流布されていた。明治期の若年者向け雑誌は、こうしたことばづかいに「標準」「一般」「普遍」「よい」「上品」「美しい」といった価値評価を与えて提示している。こどもたちがこうした価値評価図式を獲得し、性別化されたことばづかいを「われわれ日本人のことば＝国語」として受容していったことは読者の投稿から知ることができる。ラジオの登場は一九二五年のことであるが、そこでは小説同様の〈女ことば／男ことば〉を用いたドラマが放送され、多くの人々がそれまで書きことばで目にするだけだった〈女ことば／男ことば〉に、具体的な音声を伴った形で接することになった。ラジオの普及率の上昇とともに〈女ことば／男ことば〉に関する知識は「日常知」として人々に広くわけもたれるようになり、〈女ことば／男ことば〉は「インフォーマルな標準日本語」としての地位を確固としたものにしたといえる。現代のテレビアニメの分析では、〈女ことば／男ことば〉規範に関する知識が幼児期から与えられていることをみた。こどもたちは、アニメのことばから、ふたつの性別カテゴリーが非対称的に意味づけられ差異化されること、性別カテゴリーの表示はなされて当然であることを学んでいるのである。

第Ⅲ部でとりあげたのは、戦後の〈女ことば／男ことば〉規範意識である。まず、戦後五十年間の〈女ことば／男ことば〉規範にかかわる新聞記事の言説の検証を行い、〈女ことば／男ことば〉規範にもとづく女のことばづかいに対する非難、〈女ことば／男ことば〉規範の擁護、〈女ことば／男ことば〉規範の内容提示、という言説実践が広範に行われてきたことを明らかにした。これらの言説の流通はまたこの規範を維持・再生産する役割を果たすものとしての意味をもっている。つぎに、大学生に対するアンケート調査によって、近年の若い世代における〈女ことば／男ことば〉規範意識をみた。その結果から、大学生たちは、メディアを通じて流布されている〈女ことば／男ことば〉イコール標準語の〈女ことば／男ことば〉であり、それが日本語の〈女ことば／男ことば〉の標準なのだと意識しているという現状を示し、その規範意識形成に関与する言説のひとつとして学問的言説のあり

かたをとりあげて検討した。

大阪市南部における方言アクセントの変遷

武田佳子

本研究では、大阪方言アクセントの変遷を、社会の変化にも目を向け、通時的な観点から体系的に捉えることを目指し、主なフィールドとして大阪市南部に注目した。大阪市南部は明治末から大正にかけて都市化し始め、昭和初期に町の姿が形成された地域で、比較的人の移動も少なく、現在でも方言に関してかなり保守的な地域である。その大阪市南部生え抜きの高年層から若年層のデータを中心に、大阪方言の最古の音声資料である初期落語データに関する先行研究の報告をもっとも古い世代のデータと位置づけて援用し、若年層のアクセントに見られる特徴的ないくつかの項目に注目して、明治から現在までの変化について論じた。大阪市南部を中心とした方言アクセントの変遷を整理し、その底流にある共通項について考察し、大阪方言アクセントの変化の方向性とメカニズムを探る試みである。本稿では、以下の項目について各世代ごとのデータを示して変化の実態を明らかにすると共にその変化についての分析を行っている。以下はその概要である。

一．高起無核化の拡大

現在では全世代で格助詞「の」による無核化が多用されている。先行研究によれば幕末前後に多くみられた「の」による無核化は、明治期に衰退したという。しかし、その後の世代を見ると、明治期にいったん減少した「の」による無核化は大正生まれの世代から増加し始め、現在に至っている。共通語の音声がマスメディアを通じて伝わることの少なかった世代で増加に転じていることから、大阪方言には、細かい上がり下がりを平板化しようとする傾向が内在しているうえに共通語の影響がその性質を後押しして、世代が下がるほど無核化が拡大している可能性があると思われる。

二．二拍格助詞〈から〉の音調の変化

明治生まれまでの世代では順接していた〈から〉が、現在の中・若年層ではほとんど、高年層でもかなりの割合で無核語にはＨＬで後接するように変化している。この変化は大正生まれの世代から見られ始めるようである。結果として、順接の場合の三種類（ＨＨ、ＬＨ、ＬＬ）の音調の使い分けが二種類（ＨＬ、ＬＬ）の使い分けになっている。なぜ変化したかの理由は特定できないが、接続規則が簡略化され、記憶の負担が軽減したということができる。

三、二拍助詞〈さえ〉〈こそ〉〈だけ〉〈より〉〈ほど〉の音調について

伝統方言ではＨＬか低接（ＬＬ）であった〈さえ〉〈こそ〉が、無核語には〈から〉と同じＨＬの音調で後接するようになっている。ＨＬの音調は伝統方言でも使われており、音調そのものは変化したわけではないが、「無核語にはＨＬで後接する」という接続の仕方が変化に匹敵すると思われる。また、伝統方言ではＨＬの音調はもたなかった〈ほど〉〈より〉にもＨＬ化の傾向が見える。出現頻度には差があるが、これらの二拍助詞でまったく同じ傾向がみられることから、大阪方言において二拍助詞の接続規則をＨＬにパターン化しようという傾向が生じている可能性がある。

四、二拍五類名詞の現在

大阪方言アクセントの特徴の一つに、二拍五類名詞および二拍五類名詞と同じアクセント型の語（以下、「二拍五類型名詞」という）に見られる拍内下降がある。しかし一九八〇年にはすでに、当時の若年層（現在の中年層）で拍内下降の音調が消失しつつあることが指摘されている。現在の中高年層で拍内下降をまったく使用しなかったのは中年層の女性一名だけで、その女性は拍内下降に相当するところに低と高の中間的な音調やＬなどの代替的な音調を使用していた。しかし他の中高年層の人も、当該語すべてが拍内下降の音調になるわけではなく、出現環境などにより中間的な音調や代替的な音調になる場合も多くみられ、結果として中高年層が読み上げ文で使用した二拍五類型名詞の音調は、計九種類に上った。若年層は専らＬＬかＬＨの音調のみを「語の出現環境による切り替え」で使用しているが、いずれも上の世代が使用している音調の一つである。若年層の使用音調は中高年層の使用する代替的音調との連続体である可能性が強い。

若年層で特徴的な音調のほとんどは、使用割合などが異なるものの、上の世代にも見られるものである。一見変化しているように見える若年層の使用する音調は、個々のものを取り上げれば上の世代とは異なっていても伝統方言アクセントの体系にあるものばかりで、大阪方言と異質なものを取り入れて使っているわけではない。しかし上の世代と同じアクセント体系の枠の中で、世代が下がるほど簡略化、単純化の方向に向かっていることは確かであろう。

「日本語を話す私」と自分らしさ

― 韓国人留学生のライフストーリー ―

中山　亜紀子

話す言語が違えば、その言語を話す「私」に対する感情が変わるという人がいる。話す言語によって、自分に対する感情がかわることを「自己感」の変化とも呼ぶことができるだろう。なぜそのように、「自己感」が変わってしまうのだろうか。これを明らかにしたいというのが本研究の出発点だ。

九〇年代には、第二言語習得研究で、学習者の側から言語学習を見ようという研究が多く見られるようになった。それらによると、言語を話すことに対する感情とは、言語学習者と、その人を取り巻く環境との関係によって決められるという。これらの研究は、ポスト構造主義、社会構成主義などの影響を受け、アイデンティティやジェンダーという用語をキーワードとしていた。本研究も、この潮流の中にあることを自負するものである。

本研究の特徴として、個人史的なアプローチの必要性から、ライフストーリーを用いたこと、さらに、その中に見られる二つの「自分らしさ」に着目したことが挙げられる。一つ目の自分らしさとは、ライフストーリー全体を通して語られるその人らしさであり、もう一つは、日本語を話す自分に対する自分史的な評価としての「自分らしさ」である。

本研究では、ある言語を話す自分に対する「自分らしい」または「自分らしくない」という評価が、どのように生まれるのかを明らかにしようとした。

また本研究では、ライフストーリーを、研究協力者がインタビューで語った、過去の出来事を時間軸に並べなおして作られるその人の物語の一つという意味で用いる。そこには、インタビューの聞き手として、またライフストーリーの編者としての筆者が大きくかげを落としている。

本研究の研究協力者は五人である。五人とも日韓共同理工系学部留学プログラムで虹野大学に留学し、予備教育中に筆者の日本語授業の受講者だった。調査は、一人の協力者につき、三回または四回インタビューを行った。その後、インタビューで話されたことを文字化し、出来事ごとに分割し、時系列に並び替えてストーリーを作った。そのストーリーを協力者に返し、チェックしてもらった。

五人は、「頭がよい自分」であることを大切にしてきたW君、勉強で一番になることを自分に課し、非常な努力をしてきたJIN君、エジソンのような科学者になりたいと思っている朴さん、立

志伝中の人物のように起業し、名を成したいイ君、現在のところあまり問題なく過ごしているように見えるフン君であった。

五人のストーリーでは、共通して、友だちとのネットワークのことが語られた。ネットワークでは、彼らの将来、そして過去が交渉されていた。つまりネットワークの中で、協力者と日本人の友だちや指導教員とが同じ将来に向かっているかどうか、過去の自分がそのネットワークの中で認められるかどうかがネットワークに対する投資を決定づけていた。

また、日本語が圧倒的な力をもつ虹野大学における日本人ネットワークの中では、彼らの文化的資本は新たに評価され、どのように提示していくのかという問題を伴っていた。例えば「韓国人である」という文化的資本は、その提示の仕方によって、日本人に受け入れられたり、逆に拒絶されたりした。このように異なって評価される自分をどのように受け入れるのかが、彼らのネットワークに対する投資を決定し、ひいてはネットワークの形成に成功するかどうかを決定していた。

さらに、このことは、日本語を話す自分を「自分らしい」と感じられるのかどうかにおいても、大きな意味を持っていた。

朴さんとイ君は日本語を話す自分を仮の姿だと考え、韓国語の自分が本当だと考えていた。朴さんとイ君は、韓国語を使う際、相手を笑わせ、話を引っ張るという、高度に社会文化的な話し方をしており、そのように話す自分こそが、彼らが「自分らしい」と感じる自分であった。朴さんもイ君もこのような話し方を日本語では実践できず、それが日本語を話す自分を「自分らしくない」と考える理由であった。

一方、W君とJIN君は、日本人の友だちの反応によって、自分の使っている日本語の正確さなどを判断し、日本語上達の手立てとしていた。そして、日本語を話す自分を「自分らしくない」とは考えていなかった。彼らが日本人とのネットワークの中で「learner」の立場に立つことができたのは、彼らにとって、アカデミアでの成功が、ライフストーリー上の自分らしさを形成する大切な要素の一つであったからではないかと考えられる。彼らは虹野大学で自分のライフストーリー上の「自分らしさ」を貫いていたのだ。

また、フン君は日本語を話す自分と韓国語を話す自分は異なるが、両方とも自分だと考えていた。フン君は、日本人の友だちネットワークの中で期待される「韓国人」像や「留学生」像をあえて実践することで、友だちを広げ、楽しい時間を得た。そして、そのように日本人の視線を取り込んで構築されたフン君像を「B型のフン君」と呼び「自分らしい」と認めた。

これらのことから、本研究では、日本語を話す自分を「自分らしい」と認めるか否かは、日本で新たに構築される「××である

自分」をどのように受け入れるのか、あるいは、どのように自分を提示するのかという問題と、ライフストーリー的な「自分らしさ」の掛け算によって作られる感情だと結論した。

肥筑方言における「サ詠嘆法」の記述的研究

濱中　誠

本稿は、肥筑方言の「サ詠嘆法」の特質の記述・報告を試みるものである。

肥筑方言域には、カ語尾形容詞述語文「アーウツクシカ」に対し、「アーウツクシサ」のような感動表現形式が併存する。本稿は、臨地調査で得られたデータを分類・整理することによって、当該事象の文法的・表現的特質を明らかにすることを目的とする。

この「サ詠嘆法」は衰退の過程にあり、今、記述・報告することに、方言学的・国語学的価値があると認められる。『サ詠嘆法』を対象に総合的記述を行う論考は、管見の限り見られないようである。

第一章は、「サ詠嘆法」に関する研究史を、原田芳起氏の『熊本方言の研究』の記述に着目し、問題史的に辿った。この整理によって従来の研究は、散発的であり、さらに、先行研究を踏まえているものが少なく、また、現象記述のための術語などに、齟齬が生じているものがあるという問題点が確認された。

第二章は、本稿が分析の対象とするデータが、どのような調査によって得られたものなのか、調査の日時・話者・方法などについて記した。

第三章は「サ詠嘆法」の実態とその特質の記述を四節に分けて行った。

「第一節「サ詠嘆法」の実態記述」では、音声的実態・文法的実態・表現的実態について、それぞれ一小節を用いて報告を行った。

音声的実態として、「―サ」は、長呼のものだけでなく短呼のものであっても「強調」という点に関して有標性が認められるものがあるということを明らかにした。

文法的実態として、「サ詠嘆法」は、単文でも複文でも出現するが、複文の出現率は低いこと、最も出現頻度が高いのは単文の一語文型であること、〈体言+助詞+「―サ」〉の形式において用いられる助詞には、ノ・ガ・ワ（は）などがあるが、ノが圧倒的に多く、ワ（は）は僅少であることなどを明らかにした。

表現的実態として、「サ詠嘆法」は、心内語としても用いられるが、主に独白に用いる表現であること、程度が強調されている

ように感じられることが多いこと、現場性の非常に強い表現であること、判断（判定）の形式としては用いられることが無く、感動表出専用の形式であることなどを明らかにした。

「第二節『―サ―サ』型の実態とその特質――『―サ』型との異同」では、従来「サ詠嘆法」の実例として、「―サ」型と特に区別されることなく報告されてきた「―サ―サ」型について、「サ詠嘆法」に一括することが妥当であるか否かを検討した。

「第三節『サ詠嘆法』の盛衰」では、先行研究に見られる盛衰に関する論考を整理し、従来、盛衰の根拠となるデータが示されてこなかったという問題点を明らかにした。

「第四節『サ詠嘆法』の分布」では、「サ詠嘆法」の分布について言及のある先行研究を整理し、分布図の検討も行った。基礎資料とも言うべき分布図が非常に少ないという問題点を指摘し、さらに、筆者が作成した地図を用いて、文法的事象などと分布とのかかわりについて考察を行った。

第四章は、「サ詠嘆法」と萬葉集などに見られる所謂「さ語法」とを対照した。これは、従来、両者を同一視する論考が複数存したが、詳細な対照はなされておらず、検討が必要であったためである。対照の結果、両者はほぼ相違点の無い事象であることが明らかになった。

第五章では、「サ詠嘆法」の文法的基本性格について、山田文法の感動の喚体句論を整理・対照することによって明らかにした。考察の結果、「サ詠嘆法」は、感動の喚体句の一種、即ち、感動の対象に呼びかける、呼格の体言を中心とする表現であると解釈した。また、これまで統一的解釈の見られなかった「―サ」の品詞について、装定機能・述定機能・活用がなく、形容詞とは考えにくいという「サ」の性質なども勘案し、これを体言であると認定した。

さらに、「―サ」一語だけで成立している文が、典型的と認められる程度確認され、山田文法の一部論考に見られる「連体修飾語が必須である」という感動の喚体句の成立方式の定義について、これを批判し、発展的解釈を試みた。

また、「―サ」一語が複文の一項となって複文成立をささえたり、「―サ」に直接副詞が接したりする、「―サ」を体言と捉えると相矛盾するかに見える実態を統一的に解釈するには、「サ」を単なる体言化の接尾辞と捉えるのではなく、句形成要素として見るべきであるということを明らかにした。

以上のような考察から、「サ詠嘆法」と呼ばれてきた当該事象の呼称について、「サ句法」と名づけるのが適切であると新呼称を提案した。

上記のように、本稿は臨地調査で得られたデータを分類・整理することによって実態報告を総合的に行い、「サ詠嘆法」を感動

の喚体句の一種であるとはじめて明らかにした。

新世代中国人の日本留学
―なぜ彼らは神様の子になったのか

範　玉梅

二〇〇三年、日本は留学生一〇万人時代を迎え、留学生は六割以上、就学生は七割以上が中国出身者となっていた。一九九〇年代末頃から中国人留学生は一人っ子が主役になり、彼らの来日によって、第三次の中国人留学ブームが始まった。この背景をした本論文は中国人留学生が通うキリスト教K教会を取り上げ、留学生居場所作りという筆者の修士論文（範，二〇〇四）に残された課題を解決しようとするもの。筆者は質的研究であるエスノグラフィーを援用し、二〇〇四月一〇月から二〇〇七年一〇月までの三年間のフィールドワークを行い、主に参与観察及びライフストーリー・インタビューを通してデータを取った。

エスノグラフィーは「文化の記述」である。様々な葛藤を抱えた新世代の中国人留学生が困難を乗り越え、自分の生きがいまで見つけたという成長物語から、暗い時期から立ち上った彼らの精神的な成長にとって、家のようなかけがえのないK教会という居場所の重要性が明らかになった。それでは、K教会は具体的にどのような条件で若者の安心できる学びの場を作り上げているのだろうか。本研究は佐藤（一九九五b）の学びの概念を用いて、「教会システムの運営」、「教会の学びの展開」「学びと教えの分裂を克服する工夫」「指導者の参与」という四つの視点からK教会の居場所作りの記述分析をした。その結果、留学生の異文化適応の架け橋の役割を果たしている教会は、留学による「家の雰囲気、社会の繋がり、監督力、遊びの場」というような環境の損失を補完し、若者を主体的に教会に関わらせるため、システムに、以下の三つのことが積極的に取り入れられていることが明らかになった。

（一）留学生の趣味を生かすこと
（二）留学生によって新人を育てること
（三）留学生に教会運営に参加させること

つまり、共同体はそれ自身の内在性が成立せず、主体としてそこに属することができない（ナンシー，一九八五）。大阪にはキリスト教教会が数多くあるにもかかわらず、K教会にだけ多くの留学生が集まってくる。重要な他者の存在が当然その理由の一つであるが、それ以外に、教会の活動がこの共同体の内在性を豊かにしている一要因であると考えられる。K教会では、我が家のような温かい雰囲気作りによって愛が生み出され、様々な活動に積

極的に参加することで、留学生の主体性が発揮される。自発的な活動によって積極的な自由が実現できるという意味で、共同体の内在性につながり、留学生の教会に来る道を作ったのだろう。つまり、教会では自発的に活動できるということが若者の自己実現につながり、彼らに自由を与えた。それゆえ、信仰があるかないかにかかわらず、皆居心地よくいられるようになったのだろう。

したがって、本論文の「結び」では、K教会の居場所づくりに基づいて、「物語・他人・学び」という要素の関連性を探り、個人の成長における学びの意味及び居場所の意味を述べ、K教会の居場所作りをヒントとして日本語学校の学びの再生を考えた。多くの問題が絡んでいる日本語教育の現場において、留学生の居場所作りの改善策を考えるために、教会の学びから学べることの一つに日本語学校の学習概念の転換があるのではないかと考えられる。次に、留学生の留学による環境損失を補完するには、教会の工夫に基づいて、学校という空間を以下の四つの面から生かすことを考えた。

① 学校という保護網意識の強化。
② 遊びの場の保証・施設の完備。
③ 教室の空間の運営。
④ 社会とのつながり。

さらに、先生であり、友達であり、父親であるという牧師の姿から示された教育的関係の再構築の可能性について言及した。この教育的関係はそれ自体調和的で一次元的な教師－子供関係（Nohl, 1978）ではなく、現在の日本語教師の認識する大人対大人の関係でもなく、状況に応じてそのつど変容する文脈依存的な関係であると言える。教育的関係の再構築に留学生への理解が必要となり、これは教師の学びに繋がる。「心の成長に関心を持ってほしい」というような留学生たちの生の声に耳を傾けることから教師の学びは始まるのではないかと筆者は考えた。教師が自分の中の「留学生」を大切に育て、学び手の「語り」を引きだし、学生を理解しようとすることの重要性を論文の最後に強調した。

空間を表す形式名詞の意味と機能

方　允炯（バン　ユンヒョン）

本論文は、日本語における空間を表す形式名詞について、「うえ」「した」「もと」「まえ」「うしろ」「あと」「うち」「なか」「あいだ」といった形式を中心に、各形式の意味・機能の全体像を分析・記述し、その発展経路を明らかにしたものである。

日本語の形式名詞については、古くから様々な研究が進められているが、これまでの形式名詞に関する研究の特徴は次のようで

ある。具体的には、①空間を表す形式名詞についてはあまり焦点が当てられていない、②空間を表す形式名詞を扱った研究でも、その殆どは意味・機能の一部分に注目して考察していたり、それぞれの意味・機能を切り離して述べていたりするものである、③通時的な変化を実証的に見た先行研究は、管見の限り、見られない、といった三点である。

そこで、本研究では、日本語における空間を表す形式名詞を対象に、意味・機能の全体像を分析・記述し、基本的な意味・機能から派生的な意味・機能へといった意味・機能の発展経路を明らかにした。研究方法としては、実際の用例にもとづき、形式名詞の前接部分のタイプと述語のタイプに注目する方法をとる（以上は第一章の内容にあたる）。

ここで、まず本論の各形式に関するまとめを整理すると次のようになる。

（一）上下関係を表す形式名詞（第一部・第二章）

この章では、「うえ」と「した」「もと」の意味・機能について、前接部分のタイプと述語のタイプに注目しながら整理した。形式名詞が空間性を失っていき、後置詞や接続助辞に移行する過程を見たあと、全体的な総括を行った。

①「うえ」は空間を表す〈形式名詞〉の機能から、〈後置詞〉と〈接続助辞〉の両方向に機能を派生させている。

②「した」は形式名詞としての意味・機能を持っているが、後置詞化や接続助辞化はしていない。一方、「もと」は後置詞化や接続助辞化をしている。つまり、主に、「した」は空間を表す〈形式名詞〉の機能を、「もと」は範囲を表す〈後置詞〉の機能を派生させており、その役割を分担させているといえる。

（二）前後関係を表す形式名詞（第一部・第三章）

この章では、「まえ」と「うしろ」「あと」の意味・機能について、個別の意味・機能を見たあと、全体的な総括を行った。

「まえ」は《空間》や《時間》を表す意味・機能を担っているが、「うしろ」「あと」はその機能を分担させている。つまり、「うしろ」は主に《空間》を表し、「あと」は主に《時間》を表す。

（三）「うち」「なか」「あいだ」について（第二部第四章～第七章）

これらの章では、「うち」「なか」「あいだ」の意味・機能について、明治期と現代とを比較しながら整理し、そのうえで、「うち」「なか」「あいだ」の張り合い関係について述べた。

「うち」「なか」「あいだ」は、明治期には意味用法が重なっているところが多いが、現代では、意味用法の役割分担をさせている。つまり、前接要素に名詞をとる「うち」は、明治期では具体的な《空間》を表していたが、現代では「なか」が《空間》を表すようになっている。動詞をとる場合も同様で、明治期には《空間》を表せた「うち」と「あいだ」が、現代では空間を表さなくなっており、その役割を「なか」のみが担っている。

これら個別の記述をふまえたうえで結論をまとめておくと、次のようになる（第八章）。

①形式名詞、後置詞、接続助辞の相互関係を明らかにした

後置詞、接続助辞は形式名詞からの派生と位置づけられる。このような枠組みはこれまで明示的に示された例はなく、この枠組みを提示することで、形式名詞、後置詞、接続助辞の三者の関係性を有機的にむすびつけることが出来た。

例えば、「うえ」の場合、形式名詞としての使用が本来的なものであり、意味的には《空間》を表すのが基本的だが、「研究」など、前接の名詞が空間性の希薄なものになるにしたがって、形式名詞としての性格は薄れてゆき、後置詞に移行するものと考えられる。また、「相談するうえで」など、動詞に接続した場合も、形式名詞としての性格は薄れてゆき、この場合は接続助辞に移行するものと考えられる。

②通時的なアプローチを行った

形式名詞の研究に関しては、これまで通時的な変化としてのアプローチはほとんど行われていなかった。これに対し、本論文では「うち」「なか」「あいだ」を例として明治期と現代の比較を行い、以下のことが明らかになった。

・名詞接続の場合、「うち」は具体的な《空間》を表す名詞としては使いにくくなった。一方、「なか」「あいだ」にそのような変化は見られない。

・動詞接続の場合、「うち」「あいだ」は《時間》しか表せなくなっている。一方、「なか」は《時間》を表せなくなった。

以上のように、現代では各形式間で意味の棲み分けが生まれたといえる。

最後に、個別形式における今後の課題を提示したあと、「うち」「なか」「あいだ」以外の形式についても明治期の事例を分析する必要があると述べ、論文全体を締め括った（これも第八章）。

韓国高年層日本語の実態からみる第二言語の保持

黄　永熙

本論文は、韓国高年層が戦前に習得し、六十年以上も経過した現在も維持している日本語を対象にその言語的特徴を記述・分析することで、第二言語保持のメカニズムを明らかにしようとしたもので、二部九章で構成されている。

第一部の第一章では、韓国高年層日本語の普及過程と社会言語的状況に対して概観し、その日本語は主に西日本地域出身の教師が教える教室場面で習得され、戦後使用場面は消え、話者数も急激に減少したことを指摘した。

第二章では中間言語の観点から先行研究を概観した後、社会的属性を統制群とした実証的研究としての本稿の研究方法及び目的を提示した。

第三章では話者八人を「中学校卒業まで日本語を習得したM層、小学校卒業まで日本語を習得した後職場でも使用したW層、小学校卒業まで日本語を習得したP層」の三つのグループで分けて四人の日本語母語話者と録音した自然談話の調査概要について説明した。そして、対照資料として他地域（台湾・南洋群島・在日コリアン・大阪方言話者・韓国人学習者）の日本語に関する情報をも記述した。

第二部では自然談話データを五つの言語項目に対して上記の各日本語と比べることで韓国高年層日本語が持つ独自的な特徴を明確にした。

まず、第四章の存在表現では、話者は「オル・イルを併用するM層」「オル・アルを併用するW層」「アルのみを使用するP層」の三つのタイプで分けられた。オルが一番多く使われているが、非標準形のアルが有情物の空間存在用法で存在主体と構文的な制約を受けて汎用される傾向がP層に顕著であった。その保持の背景には、化石化や認知言語学的要因が働いていることを明らかにした。

第五章の可能表現では、話者は「派生動詞・デキルを使用するM層」「派生動詞・デキル・非標準形を使用するW層・P層」に分けられた。すべての話者に共通して派生動詞が観察されるが、W層・P層には非標準的な「VNデキル」「副詞ヨク構文」など、韓国語構造を援用する方策が見られた。

アスペクト表現を分析した第六章で話者は、「テオル・テイルを併用するM層」「テオルを使うW層」「テイルを使うP層」の三つのタイプに分けられるが、使用形式はテイルに収斂されていく傾向にある。一方、結果状態用法のテオルの保存が難しいこと

が分かった。

第七章の否定表現では、話者は「ン・ナイを併用するM層」「ナイのみを使うW層・P層」の二つのタイプに分けられ、後者にはその他にも非標準形の否定表現も多く見られた。また、方言型ンの保持度は低く、インフォーマルな場面で一部の五段動詞だけに使用が集中しており、使用形式はナイに収斂されている。

文末表現を扱った第八章では、話者が情報・判断・主張などを聞き手に明示的に伝達する機能を持つ文末詞ヨの例がすべての話者に確認される中、「対人関係のヨ」が日本語能力の低いソウル出身の女性話者6W・8Pに多く見られる点、文末詞を付け加えないデス・マス体の使用が慶尚道出身の話者7Pに著しい点、日本語能力の高い話者はヨ以外の文末詞も使い分ける点から母語干渉の可能性と母方言との関連性を提示した。

他地域の日本語との比較では、方言形テオルは韓国高年層、ンは台湾高年層の保存度が高く、同じ方言形でも収容・保存の方式に地域的差があることが分かった。在日コリアン話者・大阪方言話者との比較では、単純化の現象と母語の影響が特徴的であることが分かった。韓国人日本語学習者との比較では、方言型と（ラ）レルの使用、多様な文末詞の使用などがその違いとして指摘することができた。

最後の第九章では、第二言語としての韓国高年層日本語の保存メカニズムは、変異形とスタイル切換えの側面からみて、「M層（安定型）、W層（混在型）、P層（単純型）」という三種類のタイプに分けられ、それぞれが連続体を成していると整理した。そこには「単純化、分析化、回避、転移」という要因とともに「再構成、類推、汎用」などの要因が働いて、初期段階の日本語へ回帰することだけではなく、新しい形態の中間言語を形成して行く過程として解釈した。

喪失と獲得をめぐる言語意識

―「在日」を事例として

前田達朗

権力と言語の関係性については、抑圧される小さな言語集団が、その言葉を守るべく「闘う」マイノリティたちの姿が描かれる物語がくり返されてきた。民族の象徴として言語と民族をむすびつけるイデオロギーはマイノリティがその存在をかけた運動には不可欠なものであった。人々がことばに対する思いを抱くとき、それは言語意識と呼ばれ、ことばをどう扱うか、そのエスニック集団がどこへ向かっていくのかを知る手がかりになると考え、個人の言語意識と集団の言語イデオロギーを研究の中心的課

題に据えた。さらに朝鮮語が「できない」人びとが多数を占めると考えられる集団を考察するにはこれまでのように朝鮮語が出来る人びとの言語事象を追うだけでは十分ではないと考えた。これらをふまえ、本論文では「民族＝言語」イデオロギーが「在日」どのように伝えられてきたかを考え、それが個人のレベルでどのように受容され、言語意識として、学習に代表される言語行為として表現されるかを、特に若い世代を中心に考えた。

一九四五年の「解放」後、朝鮮人が求めたのは「国語」としての朝鮮語と教育で、間違いなく帝国日本が推し進めたものと同じ「国語」思想であった。「民族」と「国民」が「在日」の文脈の中では未分化なものであり、朝鮮半島の分断も投影され、本国あるいは祖国と呼ばれる韓国・朝鮮との関係性の中に自分を同一化していた「民族意識」は世代を経て変質してきている。しかし「朝鮮語が出来なければ『正しい』朝鮮人ではない」という言説は今なお生きながらえている。母語としての継承は断絶し、朝鮮語の学習が保証されない現状では、若い世代で朝鮮語を獲得するのは主に民族教育の経験者であるとされることが多い。しかし「民主化」以降、「留学」が身近になり様々な手段や目的で韓国に行くようになった。それ以前に主に民族団体の主催する教室や、日本の中での少ない機会をとらえて学習していた世代とは大きな違いがある。

また「日本」が少数言語をどのように扱ってきたのかを「在日」社会の中での朝鮮語の「衰退」の原因とされてきた「朝鮮語への無理解と偏見」という従来の理由付けを見直す意味で他の少数言語のたどった道筋の事例として奄美大島の「シマグチ」をとりあげた。阪神工業地帯が工業生産のトップを担った時代に朝鮮からと同様にまた「移民」してきたグループでもあり、その成り立ちと現況には共通するところとがある。

言語意識は従来「言語」に対する意識だとされてきたが、「在日」社会での言語イデオロギー形成の歴史的な過程を追い、それらの個人への現れ方を考えると、言語そのものについての意識というよりも、その集団や社会を支配する言語イデオロギーや、言語をめぐる様々な言説をどう受け容れるかということだと考えられる。これは朝鮮語の能力に関わらず、「言語＝民族」イデオロギーを内面化し、それをもとに個人が言語意識を構築していることがインタビュー調査の中から見えたことによる。評価としての言語意識の高さが能力につながるという従来の定義への反論の一つになると考える。さらに韓国に留学し、高い言語能力を獲得した留学生たちが、言語＝民族イデオロギーが目指すところの「立派な韓国人（朝鮮人）」だと自らをとらえているかどうかを検討した。　彼らが韓国でまず突きつけられるのは、自分たちが「他者」であるということである。いくつかの「留学」をめぐる事例

を通じて、言語とアイデンティティの関係がけして「うまいから結びつきを強く感じるようになる」ということではないことも見て取れた。彼らは「どちらかひとつでなければ中途半端」だという日本社会にも「在日」社会にも存在する縛りを越えてしまうのである。少数者の側に立つことで見えなくなっていた「在日」における「言語イデオロギー」、あるいは「民族」の排他性について論じることで、従来型の「祖国」との関係の中で「在日」であることを見いだすことの限界について指摘し、留学生の見せてくれたような「距離感」を認めていくことがエスニシティとしての「在日」がつながっていくための一つの道ではないか、というのがひとまずの結論である。

対称的な社会関係における行為指示

―ニュータウン自治会での作業場面から見る―

牧野　由紀子

従来の行為指示研究は「依頼」研究が中心であり、数少ない「命令」研究も職場の管理職など非対称的な関係での研究に限られているが、現代社会においてはボランティアグループなど対称的な関係でも命令指示がおこなわれることはしばしばある。本論文は、対称的な関係での命令指示において、命令指示、およびそれに伴う配慮がどのようにおこなわれ、それは社会関係の「対称性」とどのように関係しているかを明らかにすることを目的とする。

本論文では、ニュータウン自治会（大阪府）の作業場面で行為指示談話（自然談話）を収録し、そこから帰納的に実態を記述・分析するという方法を採用した。自治会長（女性）の行為指示発話において表現形式のバリエーションにどのようなものがあり、それぞれどのような状況で使用され、なぜその形式が選ばれ、そこにどのような配慮があるのか、という問題意識のもと、形式と発話機能、発話の連鎖、メンバーとの相互行為に注目した。分析項目として（一）スタイル切換え（二）直接形式の使用（三）間接表現の使用（四）メンバーの関与（五）対称的関係との比較という五点を取り上げ、量的・質的両面から分析した結果、以下の点を指摘した。

（一）スタイル切換えについて（四章）

丁寧体共通語形式と普通体方言形式という二つのスタイルが使われ、会長発話か個人的な発話かを伝えるメタメッセージ機能で使い分けられている。対称的な関係では「役割的行為」と「個人的行為」が切り換えられているが、スタイル切換えによってその違いが示せるのである。

（二）直接形式の使用（五章）

命令形などの直接形式（大阪方言では連用形命令とテ形命令）が《命令》の発話機能で多用されている。権力者の発話はどんな表現でも「命令」となりうるが、対称的な関係ではそうはいかず、「命令指示」を明示しなければならない。直接形式は「命令指示マーカー」として機能するが、非対称性を含意するため、一つの行為指示において一～二度しか使用されない。

（三）間接表現の使用（六章）

対称的な関係では行為指示が常に受諾されるとは限らず、反論が予想される場合や負荷が強い場合にはまず間接表現で行為指示がおこなわれ、受諾する意志が確認された時点で直接形式が使用される。間接表現は直接形式の使用を最小限にする緩和的行為指示表現として機能する。

（四）メンバーの関与について（七章）

会長に対してメンバーが直接形式で命令指示をおこなうなど行為指示の双方向性が見られる。メンバーは行為指示を受諾する際も「はい」という応答を避け、自分の意志や確認を述べる形式で応答し、共通の成員であること（「共－成員性」）や対等性を志向したふるまいをしている。

（五）対称的な関係での行為指示の特徴（八章）

職場の管理職という非対称的な関係での行為指示研究と比較した結果、対称的な関係では直接形式がより多用されるが、使用に際して細心の注意が払われること、スタイル切換えや補助的ムーブ、リラックス発話など対称性を維持するストラテジーが多用されることが分かった。

以上、本論文は一事例での事例研究であるが、自然談話を扱った点、発話の連鎖に注目した点で新たな試みをおこなった。対称的な関係での行為指示研究は現代の重要なテーマであり、今後、他の事例や非対称的な関係と比較することでさらに考察を深めていく必要がある。

商品名の命名メカニズムの研究

蓑川　惠理子

本研究は、おもに新聞広告を資料として、商品名の《命名メカニズム》を明らかにすることを目的に、家電製品名と飲料の名前について調査・分析・考察を行ったものである。

商品名の研究では、なぜそのような命名が行われたのか、将来どのような名づけがなされるのかを予測する《命名のメカニズ

ム》が明らかにされなければならない。そのためには、商品カテゴリーに対する競合各社の名づけ全体を見渡し、さらに、固有名だけでなく普通名による名づけも商品名と認めて、その「変遷」に見られる規則的な傾向を見出すことが必要である。このような観点から、第一章では、戦後半世紀の新聞広告を資料として、「三種の神器」といわれた家庭用電気製品名（冷蔵庫・洗濯機・テレビ）の変遷を、四種の商品名構成要素を設定した上で、調査・分析した。その結果、①商品名の変遷において構成要素の出現には一定のパターンがある、②商品名構成要素の出現パターンは新商品・新機能の出現とその普及（一般化）とに関係する、③新商品・新機能の普及（一般化）に伴って類概念の意味が変化する、という三点を明らかにした。

さらに第二章では、商品名の《命名のメカニズム》を精密化するために、ワープロのデータを加え、再命名の現象が、商品名（テレビ・洗濯機・ワープロ）にも見られることを明らかにした。再命名とは、従来あるもののほかに、それと同一範疇に入る新しいものが出現して、その新しいものの視点から従来のものが再把握されて、名付けられる仕組みである。この再命名は、基本的に新旧並存のときに生じる現象であり、新旧交代のときには生じない。したがって、技術革新の激しい家電製品の場合、特に広告においては、再命名が行なわれることはないものと予想された。しかし、新聞広告を資料として商品名構成要素の出現状況を調査した結果、①新機能を持つ商品が登場し、それが増加傾向を示す段階になって、メーカー側に旧商品を販売し続ける意志があるとき、旧商品に再命名が行われる、②再命名には、旧機能を新機能から区別するために行われる基本型のほか、旧機能に新商品にはない別の機能を付加して行う付加型、かつての新機能で一旦は類概念に吸収されたものを再利用する再登場型の三つの型がある、③再命名には、旧機能の対立概念以外に、旧商品のセールスポイントとするために、非対立的な概念を表す〈機能名〉が用いられることがある、という三点が明らかになった。そして、この再命名を組み込んだ、商品名の《命名のメカニズム》のモデル化を試みた。

第三章では、家電製品とは異なる商品カテゴリーとして、飲料を取り上げ、新聞広告を資料として、通時的に調査・分析した。その結果、家電製品ほどはっきりとした周期性は認められず、また、飲料の違いによる差は見られたものの、総じて〈主原料名〉〈成分・製法名〉を用いた名付けが先行し、そのあとに〈固有名〉による名付けが行なわれること、五種類の飲料の中では、果実飲料がその基本と認めうることが明らかになった。

さらに飲料については、第四章で、業界団体の統計資料をもとに、企業を二つのグループに分けて、新聞広告を行う企業をA、

それ以外をBとして、分析を行った。その結果、商品名の命名に企業規模の違いが関わり、位相差があることがわかった。

以上本論では、数ある商品カテゴリーの中から、家電製品と飲料の二つに注目し、それぞれの《命名メカニズム》について検討してきた。商品名全体を貫く《命名メカニズム》の存在は確認できなかったが、少なくとも二つのタイプの《命名メカニズム》、すなわち《進化型の命名メカニズム》と《累加型の命名メカニズム》を見出すことができた。家電製品は、商品の技術革新に伴って、命名も常に変動＝進化していく《進化型の命名メカニズム》、飲料は、商品のバリエーションの多様化に伴って、命名も累加していく《累加型の命名メカニズム》といえるだろう。

定住外国人とその社会的文脈の関係から導きだす「見えない生活者」の再構築

―リフレクシブ・エスノグラフィーという手法を用いて―

八木　真奈美

法務省入国管理局報告の「外国人登録者数」は、二〇〇六年度末現在で二〇八万人となった。日本語を第二言語とする住民の増加を受け、国や自治体、また日本語教育を管轄する文化庁も「生活者のための日本語教育」という用語を使い、さまざまな取り組みを行っている。だが、現在の取り組みや支援はいわゆる「地域日本語教室」に通ってくる参加者を対象にした支援であって、教室を一歩出た後の、あるいは教室に参加していない一人の人間としての「生活者」は、この支援の枠組みからは見えていないのではないかという問題を提起した。

このような問題意識のもと、筆者は日本語を第二言語とする研究協力者の生活をフィールドとして、四年間のフィールドワークを行った。本調査の特色は、人としての「生活者」に焦点をあて、協力者のさまざまな生活場面で、エスノグラフィックな参与観察を行ったこと、また、インタビューを行い、協力者自身が日本での生活をどう捉えているのかを、リフレクシブ・エスノグラフィーという手法を用いて、明らかにしようとした点である。リサーチクエスチョンは、協力者が生活する場で何が起こっているのか、そして協力者を取り巻く文脈、たとえば、家族、仕事場、コミュニティ、また広く日本の社会が協力者の生活にどのように関わっているか、また、それを協力者自身がどのように捉え、意味づけているのか、の三点である。収集したデータから以下のような分析テーマが抽出された。分析テーマのキーワードは「見える学習者」と「見えない生活者」である。一）日本語教室における「見える学習者」としての協力者、二）教室での協力者の「見

えない学習」、三）教室という可視化された世界と離れた「見えない生活者」の仕事場での成功、四）「中国語」を媒介とする共同体における協力者と家族、友人、日本人の知人との関係、五）さらに見えない世界である協力者のアイデンティティとAgencyである。

分析の結果、協力者は、「外国人」として、日本社会から周縁化された位置に置かれていることがわかった。協力者を取り巻く日本社会の構造というマクロな文脈が、日本語教室での学習や、日本社会でのコミュニケーション場面というミクロな文脈に影響を与え、また同時に、教室の講師や地域社会の日本人との不平等なインターアクションというミクロな文脈が、「外国人」を作り上げ、「外国人」を周縁化するというマクロな構造を再構築していくのではないかと考えられた。従来の日本語教育研究では、このような日本社会の構造や、マクロな文脈とミクロな文脈との関係がほとんど議論されてこなかった。そこで本論では、更なる分析を進め、「外国人」として排除された協力者の再構築を試みた。データから、協力者は仕事場で成功し、日本語教室の講師が日本語を学習する場としか捉えていなかった教室を、中国語という言語資本を使って友人を作る場としていた。また、中国語を媒介とする身内ネットワークを積極的に活用して、仕事場の上司と話す機会を作った。このように、協力者は、自分を取り巻く状況に働きかけることができる人であり、多言語話者という言語資本を生かして生活を豊かにすることができる人であった。このような分析結果によって、本研究では、日本社会における「見えない生活者」の現状を捉え、その上で「外国人」として排除された協力者を、豊かな存在として再構築した。

最後に、質的研究の可能性として、「研究協力者の理解」を、アカデミックな世界の外へ発信できることをあげ、その結果、日本語教育に関わる教師やボランティアが何らかの意識の変革や行動を起こすことを期待していると結んだ。

日本語母語話者の撥音に関する知覚の研究
― 首都圏方言話者と近畿方言話者 ―

山岸智子

この論文は日本語の特殊モーラの一つ、撥音について日本語母語話者の知覚の実態を調査・研究した成果をまとめたものである。

標準的日本語の撥音は、音韻論では／N／と表され、音声学的には音環境によって持続時間や音色が変化する特異な存在であるにもかかわらず、大きなテーマとして扱われることはほとんどなかった。また、日本語教育においては、撥音の持続時間につい

て、日本語学習者は日本語母語話者と異なる傾向が指摘されているが、そもそも日本語母語話者がどう知覚するのかはあまり明らかにされていない。

このことから、本研究では撥音を主要なテーマとし、撥音の持続時間を変化させた合成音声を用いて日本語母語話者の知覚の動向の一端を明らかにすることを試みた。

論文の構成は一〇章から成り、一章では、音節・拍・モーラの定義、撥音に関する先行研究、日本語学習者の撥音の生成や知覚に関する先行研究を概観し、本研究の目的を述べた。

二章では、事前調査として人の自然音声を用いた知覚調査を試行し、その結果から本研究の合成音声による知覚調査の課題を検討した。

三章では、撥音の持続時間を変化させた合成音声による知覚調査の目的、回答者（首都圏方言話者、近畿方言話者）、手続きを説明し、作成した刺激音声による調査計画を述べた。

四章では、「語の明瞭性」という観点で知覚調査を行った結果を述べた。両方言話者とも、撥音が短くても一部の語を除いて「聞き取りにくい」ことは少なかったが、撥音が長くなると首都圏方言話者では「聞き取りにくい」という回答が多くなった。

五章では、「対人態度」という観点で知覚調査を行った結果を述べた。両方言話者とも、撥音が短いと「ぞんざい」と判断する傾向がみられたが、撥音が長くなると、近畿方言話者は「ぞんざい」と判断することが少ないのに対して首都圏方言話者は多くなった。

六章では、「感情的印象」に関する知覚調査を行った結果を述べた。両方言話者とも、撥音が短いと「つめたい口調」と感じる傾向があるが、撥音が長くなるといくつかのテスト語において近畿方言話者は「あたたかい口調」と感じる傾向がみられたのに対し、首都圏方言話者にはみられなかった。

七章では、規範意識として撥音の長さが「よい」か「よくない」かの評定を求めた結果を述べた。会話場面において実際に話している言葉のつもりで聞くよう依頼した結果、撥音が長いと、両方言話者とも「よくない」とみなす傾向があり、その傾向は首都圏方言話者の方が顕著であった。また、話者の心的態度が加わりやすい語群（形容詞・副詞群）は、そうでない語群（名詞群）より、撥音の長さについて長短両方向への許容度が高いという傾向が見られ、その許容度は近畿方言話者の方が高かった。

八章では、日本語学習者に七章と同じ調査を行った結果を紹介し、九章、一〇章では、日本語母語話者を対象とした一連の知覚調査結果を総合して分析し、回答者へのアンケート結果も検討した。

結果として、撥音の長さが「よい」か「よくない」かの評定

に、撥音が短い音声では、両方言話者とも「語の明瞭性」が関連する傾向があり、近畿方言話者では「対人態度」も関連していた。一方、撥音が長い音声では、首都圏方言話者が「語の明瞭性」「対人態度」が関わるのに対し、近畿方言話者は「感情的印象（あたたかい口調）」と強く関わっていた。主観的要素や個人差はあるにしても、この傾向は居住地や言語環境の影響が少なからずあり、その地域の音声の特徴や習慣によっても評定が異なることが示された。

総合的に分析した結果からは、聞き手の知覚や印象を左右する大きな要因として、場面性や聞き手を考える必要性が示唆された。どのような場面で、聞き手はどういう人なのかということである。

本研究では撥音に焦点を当てて、複数の側面から知覚調査を行ったが、多くの課題も残された。今後も音声の伝える情報について、さまざまな観点から知覚の実態を探りたいと考えている。

日本語のリズム及びリズム単位に関する基礎的考察とその応用

― 無意味語による調査と「日本語話し言葉コーパス」を利用して ―

尹　英和

一．研究の目的

本論文は言語のリズム、とりわけ日本語の話し言葉におけるリズムについて研究したものである。リズムとは人間に内在している要素であり、一定の構造が繰り返されることで感じる感覚的なもので、聴覚印象に頼ることが多く、ある言語におけるリズムの本来の姿は、その言語を見据えるだけでは把握しにくい所もある。そこで本論文では、日本語のリズムの特徴を把握するため、韓国語を母語とする学習者の発話と日本語母語話者の発話の特徴について比較を行った。また、本論文は「2モーラフット」というリズム単位の存在を前提としたうえで、それを基本単位とした音声教育の可能性を探ることを目的としている。「2モーラフット」を基本単位に語等を区切り、時間構造の配置が重要である日本語について、モーラを単位として獲得してきた人と音節を単位として獲得してきた人との間にどのような類似点及び相違点があ

るかを調べて、日本語音声（リズム）教育への応用可能性を模索することが、本論文の目指すところである。

二．研究方法及び結果

本論文では語を中心にリズム・リズムパタンの特徴を調べた。無意味語による二種類の調査（「発話調査」と「聴覚調査」）及び自発音声による大量音声データ『日本語話し言葉コーパス（ＣＳＪ）』を用いた語の検索（第三部）を行った。

「発話調査」では、日本語母語話者及び韓国語を母語とする日本語学習者に無意味語を入れた文を読んでもらった。収集した音声資料をパソコンに格納し、ＳＩＬの「SPEECH ANALYZER」を用いて持続時間を計測した。計測の基準として「リズム知覚点」を用いた。発話速度を考慮し、語全体持続時間に対するリズム単位別の比率（％）で比較を行った。母語話者が発話した語の持続時間と学習者が発話した語の持続時間に対して、リズム単位別の「比率の差の検定」を行うと、「２２」「②②」パタンでは有意差が認められない。その他のパタンでは母語話者による聴覚判断の正発音率が低い学習者ほど、「比率の差の検定」の有意差が認められる。つまり、学習者の誤発音の判断に促音及び長音のような要素が聞こえることは、実際に促音及び長音を挿入したように持続時間が長いということを意味する。ゆっくりと一つずつを強調するように話す学習者の日本語には、母語話者とは異なるリズムパタンが形成されてしまい、場合によってはコミュニケーションに障害が発生する可能性が考えられるので、学習者に対するリズム（持続時間の制御）の指導が必要だと思われる。

「聴覚調査」では、複数の日本語母語話者に、学習者が発話した調査語がどのように聞こえるかを記入してもらった。そして学習者の発話意図と母語話者の聴覚判断が一致するものを正発音と見なし、学習者の正発音率を調べた。結果、学習者の正発音率には個人差が存在する。各学習者の正発音率の平均値をみると、リズムパタン別に異なり、「２２」「②②」パタンのように発話しやすいリズムパタンも存在することが分かった。また、「聴覚調査」の結果を四種の特殊拍（長音・促音・撥音・／ai／／oi／／ui／の後部要素）別に調べ、学習者にとって習得困難な特殊拍の順位と、その逆と想定される特殊拍の自立性の順位を調べた。おおよそＱ＞Ｒ＞Ｎ＞Ｊの順に習得しにくく、その逆であるＪ＞Ｎ＞Ｒ＞Ｑの順に自立性が高いと見られる。さらに日本語母語話者の特殊拍の知覚に学習者の発話におけるピッチ型が関わっている可能性についても触れた。

母語話者の自発音声である『日本語話し言葉コーパス（ＣＳＪ）』による検索では、まず文字資料を利用して日本語のリズム

パタンの出現頻度の特徴を調べた。また、発話の意図と実際に算出された音声がずれた例から日本語のリズム・リズム単位の特徴を検証した。

学習者の「発話調査」では無意味語による読み上げ調査を行ったため、自発性が低い。母語話者の自発音声のコーパスである「CSJ」とはスタイルに差があるが、リズムパタン別にみた学習者音声に対する聴覚調査の結果を、「CSJ」によるリズムパタンの分布及び「CSJ」で見られる母語話者のリズムの特徴と合わせて考察した。結果、リズム教育において優先すべきリズムパタンは出現頻度が高いが正発音率が低い「②2」パタン等であることが分かった。

「工芸」的思考

― 日本のものづくりと近代 ―

猪谷　聡

日本における工芸の位置を明らかにしようとする先行研究は、そこに同時にさまざまな問題が入り組んでいることを明らかにしてきた。工芸の意味を問いかける研究の切り口には、すでに工芸への姿勢が含まれている。本論文では、「工芸」を扱うに際し、柳宗悦と民芸運動を手がかりに探ることにする。

民芸運動は大正末年／昭和初年より始まった。運動の提唱者である柳は、「古作品を味ふと同時に、新しく作るといふ任務を帯びてゐる」と述べているように、すぐれた民芸品をあらたにつくりだすことを最大の目的としていた。したがって、柳の民芸に関する理論は、実作活動に関する事象にも配慮しながら考えるべきだろう。本論文ではそれを、「製作」という概念から捉えることを試みた。「製作」という語は柳の著作全体を通して頻出する。また「製」ではなく「制」の文字を用いた「制作」という語も使われている。いくつかの辞書では、道具・器物をつくる場合には「製作」を、芸術作品をつくる場合には「制作」を用いている。はたして柳は「製作」と「制作」を区別しているのであろうか。まずは「製作」を「制作」と比較して、その意味を限定し、さらには、柳の理論にある何らかの独自性も探りたい。それが第一章の狙いである。

次に、実作活動において「製作」がどのようにおこなわれたかを第二章で述べた。民芸運動の実作活動において、先駆的な役割を果たした吉田璋也の業績を検討した。柳の理論を吉田が実践していく過程に、民芸理論に対するひとつの解釈があったことを提示した。

第三章は、民芸の製作における問題点をさらにつきとめるべく

「反復」という概念を明らかにしようとした。実作活動には、二つの流れがあり、それは柳のいう「個人作家」の手によるものと「工人」の手によるものである。柳の理論は「工人」のあり方に比重を置いている。「工人」に比重を置く理由は、作為の払拭という問題が根底にあるためである。柳によれば、個人意識や美への意識をなくすことが必要であった。

工芸における製作の可能性を、工人のあり方から柳は示す。しかし当然のことながら、疑問が生じる。工人においても、個人意識や美への意識が存在したはずではないか。この疑問に対して、柳は陶芸における絵付を具体例に挙げ、説明する。くりかえし繰り返し一定の絵付を幾千幾万もの土瓶や壺などの表面にほどこし、迅速かつ大量に描くことを心がけるものづくりは、反復性や多量性を特徴としている。その方法は、一つ一つの作品への執着を取り除き、技術的な確実性、熟練性をもたらす道であると、柳は論じる。「反復」という概念から「てづくり」の意味を問う。

第四章は、ものづくりという広い枠組みから生産活動の全般を捉えなおすとともに、土地におけるものづくりの在り方を探ったものである。土地におけるものづくりとは、たんに土地に導入されただけでは、土地におけるものづくりとはなりえない。それぞれの土地による相違を、各土地における固有の性格として捉えること、そして土地とものづくりとの関わりが固有の性格を生み出すことを前提とし、どのように関わっているかを探っていきたい。したがって、土地におけるものづくりとは、ある特定の土地において生産されるという意味ではなく、土地にそなわった生産活動全般である。そこから、土地とものづくりとの関係について言及した。

最終の第五章では、第三章でも挙げた創造性に焦点をあて、新作運動においてもみられた「用」をめぐる問題点を手がかりに、「工芸」のうちにあるものづくりの相、すなわち造作のない状態への志向を明らかにした。

本論全体を通じて、日本におけるものづくりの水脈をたどる手がかりを得るとともに、現代における工芸のあり方の提示を企図した。

クリストファー・ドレッサーにおける デザイン原理の生成と展開

竹内有子

本研究は、一九世紀後半に活躍した産業デザイナー、クリストファー・ドレッサー（Christopher Dresser, 1834-1904）が、デザインの諸原理をいかにしてつくりあげ、それをどのように展開さ

せていったかについてを、彼の一八五〇年代から一八八〇年代における植物学者・デザイン教育者・日本礼賛者としての著述を検討することによって、明らかにしようとするものである。

第一章では、ドレッサーが植物形態学から得た知識を「アート・ボタニー」として発展させてゆく経緯について論じた。彼は、ゲーテの形態学を参照し、生命力の重要性を学び取った。以後ドレッサーは、装飾のデザインにあたって、植物の形成理念を表現することを要とする。さらに彼は、植物の合目的性と構造に着目した。これらは、彼が後にデザイン原理の中に、主観性に基づく「装飾」および合理的「構築」を見て、発展させることになる要点であった。

第二章では、植物学者からデザイナーに転向したドレッサーが、一八六〇年代から七〇年代にかけてデザイン原理をつくりあげてゆく過程とその概要を示した。まず、官立デザイン学校の主要な教師、リチャード・レッドグレイヴ（Richard Redgrave, 1804-88）とオーウェン・ジョーンズ（Owen Jones, 1809-74）、ゴットフリート・ゼンパー（Gottfried Semper, 1803-79）の教えから、ドレッサーが何を吸収したかについて検討した。レッドグレイヴから学んだことは、デザイナーが植物をモチーフに用いる必要性と、絵画芸術とデザインの相違性についてである。ジョーンズからは、工学的な構築性の考えを習得した。またゼンパーからは、デザインのなかにある理念性とその理念的原型が多様化する諸条件および技術について習った。そのなかで、ドレッサーのデザイン原理の独自性は、植物学研究を通じた、装飾の抽象化と象徴性の強調にあった。彼は、コールの仲間の教師たちが作成した形式的な造形法則から一歩進んで、主観的表現の領域へと踏み出した。

第三章では、「アートとデザインの結合」をキーワードとして、ドレッサーのデザイン観を彼の各用語の定義に即しつつ、読み解いた。彼は、アート／オーナメント／ファイン・アートの意味を区別しながら、段階を経て徐々に、「デザイン」に関する新しい概念を取得していった。まず彼は、装飾に関して、有用性を絶対的前提として、それに従うものと規定した。したがってこのとき、デザインという言葉は、有用性と装飾からなる全体構造を指していた。その次にドレッサーは、装飾を「想像力を簡潔に象徴する」ものとして、単に自然を模倣するファイン・アートを凌ぐ、「ハイ・アート」として位置づけた。そのうえで、「デザイン」と「装飾」の違いが明らかにされた。ここにおいて「デザイン」概念は、芸術美による装飾と工学的な構築の結合として、構造の意味を加えられて、理解されるようになった。他方そのころ、ドレッサーは日本を訪問し、これまで説いてきたデザイン原理の視覚的な現われを日本美術に見て取った。それは、構造とそ

れに準じる豊かで多様な装飾が結合した美のかたちであった。

第四章では、これまで注目されてこなかった、ドレッサーの芸術思想におけるジョン・ラスキンの影響について論じた。そのうえで、アーツ・アンド・クラフツ運動とドレッサーの接点について指摘した。ドレッサーは、これまで同運動の一員と見做されたことはない。しかし、ドレッサーのデザイン活動には、自然を装飾およびデザインにいかに採用し、また芸術の統合をどのように成すかという課題があった。それは、手段は違えども同運動に先駆け、且つ連続的に捉え得る共通項である。ドレッサーの場合は、自然を抽象したモチーフに拠る装飾を、ハイ・アートと見なされるための芸術性を付与することで、合目的的なデザイン製品とそれをつくる人の位置を格上げしようとした。以上の比較を通じた結果、本研究は、モダン・デザインを軸にドレッサーのデザイン活動を一方向的に捉える視点に批判的検討を加え、彼の活動が有す「装飾」の意義に照明を当てる試論となったのではなかろうか。

「工芸」と「美術」のあいだ

明治中期の京都の産業美術

平光睦子

本論の課題は、明治中期の京都の産業美術において「工芸」という分野と「美術」という分野のあいだにあった諸問題を見直すことであり、この課題の目的は、当時成立しつつあった「美術工芸」という分野においてその外延をかたちづくったものを明らかにすることにある。

「美術工芸」は、とりあえずは「美術的価値をもった工芸」と既定しうるだろう。「美術」は明治期に西欧からもたらされた概念である。「工芸」もまた明治期になってもちいられるようになった言葉だが、実態は明治期以前からつづく日本在来の技芸である。したがって、「美術工芸」という時、西欧の価値規準で日本在来の技芸をはかることになり、そこには何らかの不整合があらわれざるをえない。このことから「美術工芸」という概念には常に曖昧さがつきまとうのだが、その曖昧さを解きほぐすことから「美術工芸」概念に迫りたい。本論は一章と終章を除いて五つの章から構成される。各章では、「工芸」という分野から「美

術」という分野のあいだに位置づけられる分野、または関連の深い分野を二つずつとりあげ、その二つの関係性が主題になっている。

第二章では、内国勧業博覧会の出品品分類から先行研究を見直し、「工芸」と「美術工芸」の関係性をとりあげた。内国勧業博覧会における「美術工芸」およびそれに準じる分類には何らかの明快な規準はなく、「美術工芸」、「工芸」、「美術」を巡るヒエラルキー意識がかろうじて目安になっていたにすぎない。明治一九年に開催された京都色染織物繡額共進会では、「美術工芸」に準じる分類がみられる。ここでは「常用工芸」という区分が「美術工芸」からの積極的な展開として設けられており内国勧業博覧会の分類とは異なる指標をみいだすことができる。

第三章と第四章では、明治二〇年頃の京都で行われた、二人のお雇い外国人による講演記録を中心に「工芸」と「工業」、「美術工芸」と「美術」の関係性について検討した。明治二一年に行われた「工業の方針」と題された講演における、G・ワグネルの主張は「日本固有の性質」を保持することである。ワグネルは、その手段として中小規模の家内制手工芸による製産を維持するようすすめた。一方明治一九年に行われた「絵画の美術工芸に対する関係」という講演等において、A・F・フェノロサは、日本固有の美術の復興と改良を推奨し、その欧米富裕層を対象とした輸出産業化を提唱した。

第五章では、二代目、川島甚兵衛の綴織をとおして、「装飾」と「美術工芸」の関係性をとりあげた。明治中期、美術工芸の意匠において絵画的傾向からの脱却が叫ばれるなか、川島は「日本式室内装飾」を掲げる。椅子式の室内を前提としたこの試みは、生活不在の装飾様式の限界を示した。

第六章では、岡倉天心が明治二七年に記した「美術教育施設ニ付意見」から「図案」と「工業」について検討した。意見書に記された美術教育構想における主要な目的は、日本伝来の工芸技術の保護、伝承であり、東京美術学校の図案科もその使命の一端を担っていた。京都では、同年、京都市美術学校に工芸図案科が設けられた。同校の目的は実務教育ではあったが、本格的な機械工業への対応は想定されてはいないことから、継承という点においては岡倉と理念を共有していたといえよう。

「美術工芸」という分野は、日本在来の「工　たくみ」の概念から、「美術」と「工業」を取り除いた概念であり、そこには近代以前の日本独自の価値観があるといわれる。「美術工芸」という分野をかたちづくるものは何か、を考えていくと、最後に残るのは「工」であり、それを移した「工芸」である。本論で浮かび上がってきたのは、「美術工芸」と「工芸」の方向性の違いである。あえて明言すれば、「美術工芸」は時間軸上の連続性を、「工

芸」は同時代の人々との関連性を志向している。そして、明治中期の「美術工芸」あるいは「工芸」は、二つの道の岐路に立っていた。

舞台表演におけるガウチョの表象と アルゼンチン・アイデンティティーの変化と持続

川端　美都子

ガウチョ *gaucho*—大草原パンパの牧童—は、その男性性や独立精神とともにアルゼンチンにおける国家像や国民アイデンティティーの構築と深く関わってきた。このガウチョと国家の伝統との関係が確立したのは、一九世紀後半の「ガウチェスコの伝統 tradición gauchesca」という民俗復興的な動き以降のことである。諸芸術分野において、この牧童をテーマとした作品が多くあらわれたほか、音楽を含む地方文化が「ガウチョ文化」として様式化され、作品内で用いられた。以来、ガウチョは様々な舞台表演において、その外見や音楽レパートリーは変化しながらも、国家伝統の象徴として表象され続けている。本論の目的は、このようなガウチョ像の歴史的変化と持続の意味について、音楽的側面から検証・考察することである。

これまでアルゼンチン・アイデンティティーと音楽との関係については、特に「ガウチェスコの伝統」期における同国のクラシック音楽とガウチョの表象というテーマで、楽曲分析を中心とした研究がなされてきた。または、同テーマについて、民俗音楽、都市音楽、芸術音楽などそれぞれの分野別に、歴史的ないしは文化人類学的視点から研究が進められてきた。しかし、各音楽分野は個別に存在しているのではなく、国民アイデンティティーの構築をめぐり、政治文化的に複雑な関係を築き上げている。本論では、「ガウチョの表象」をその交差点としながら、同国の音楽について通史的かつ複数の分野にまたがった研究を試みている。具体的に検証されているのは、以下のような疑問である：（一）一九世紀後半に構築されたガウチョ像とその価値は、現代にいたるまで、どのような意味が付け加えられてきているのか。（二）このハイブリッド化したガウチョ像は、どこまで「アルゼンチンの伝統」の象徴であり続けられるのか。そして、（三）このような「アルゼンチン性 argentinidad」を形成する過程の背後には、どのような力関係が潜んでいるのか。これらの疑問に答えるために用いたアプローチは、歴史音楽学と民族音楽学的手法を組み合わせることである。すなわち前半では「ガウチョ音楽」とされてきた地方舞踊・音楽についての記述や歴史的録音のトランスクリプション作成・分析が中心となっており、後半では都市

部と地方それぞれにおける舞台表演でのフィールドワークとパフォーマンス分析に重点が置かれている。

本論は序章・終章を除く四章で構成されている。第一章は、如何にしてガウチョが国家伝統の象徴となったのかという研究背景を提示するため、移民政策を中心としたアルゼンチン近代史と「ガウチェスコの伝統」の動きについて説明している。第二章は、「ガウチェスコ」において中心的役割を果たした、クリオージョ・サーカス *circo criollo* と呼ばれるアルゼンチン固有の大衆芸能に焦点を当てている。同時期の壇上におけるガウチョ像の特徴や、その音楽について、当時の政治社会状況との関係を指摘しながら分析している。また、希少な同サーカス音楽の歴史的録音を用いることで、当時の「ガウチョ音楽」について、より具体的な情報を提供している。第三章では、一九三〇―八〇年代を二つの時期（一九三〇―五〇年代と一九六〇―七〇年代）に分けて論じている。前半では、地方と都市間の国内移動期とペロン政権下でのポピュリズム期に、ガウチョに象徴される地方文化の意味がどのように変化していったのかについて検証している。後半では軍政期に起こった「新しい歌 Nuevo Cancionero」と呼ばれる民俗復興運動に注目し、そのなかで改めて問われた「アルゼンチン性」とは何かという疑問について考察している。第四章では、現在のアルゼンチンの地方と都市部における舞台表演について、民族誌的アプローチを採用しながら、現場から描き出すことを試みている。これにより、現代社会において壇上でのガウチョ像を国民アイデンティティーとして保つことに伴うジレンマを、グローバリゼーションを含む様々な目に見えない力関係のなかで論じている。

『月刊音楽』に見る韓国の西洋音楽受容
―一九七〇年から一九九二年までの演奏会データを中心に―

金　銀周

本論文は二〇世紀後半の韓国における西洋音楽の受容の状況を、一九七〇年から二二年間にわたって発行された音楽専門雑誌『月刊音楽』を主たる情報源とすることにより、探究するものである。論文のタイトルにおいても本文においても「韓国」を掲げているが、実質的には首都ソウルにおける状況を主な領域としている。それは当該雑誌において扱われている演奏会などの出来事がほとんどもっぱらこの都市におけるものであることが基本的な理由であるが、韓国における首都ソウルの、他都市、他地域に対する、圧倒的な優位を考慮に入れるなら、こうした限定は十分に理解されうるであろう。

『月刊音楽』は、一九七〇年から一九九二年まで、韓国の音楽関連雑誌としては例外的ともいえるほどの長期間にわたって発行された雑誌であり、そこから韓国における西洋音楽の受容はもちろん、様々なことが読み取れる。本論文ではこの『月刊音楽』に掲載されている、演奏会などを含んだ様々なデータを細かく分析し、そのことから読み取れる歴史的、文化的なことを通じて、韓国における西洋音楽の受容の特質を明らかにしたいと考える。

本論文は四つの章からなり、以下のような構成を示す。

「第Ⅰ章：韓国戦争後から一九六〇年代までの政治体制と音楽受容」は、大きく二つの内容から構成されるが、最初に、韓国戦争後からの政治体制と経済・社会の状況について述べる。その後、これらの状況を背景に、文化的な状況と音楽受容について述べてゆくことにする。この際、主な四つの項目を設け（専門の音楽教育機関、コンサートホール、演奏会と主な演奏団体、音楽協会）、それぞれがどのような歴史を歩んでいったのかについて考察する。

「第Ⅱ章：韓国における音楽雑誌」では、まず、先行する時代の音楽雑誌の発行の状況を振り返り、その後、本研究の中心である『月刊音楽』やその他の音楽雑誌について概観し、最後に、『月刊音楽』が持つ特性を知るため、この雑誌の簡単な内訳を紹介する。そして、発行者であるクム スヒョンについて、またこの『月刊音楽』に対する様々な音楽人たちの声を紹介し、この雑誌が持つ価値や存在意味などについて述べることにする。

「第Ⅲ章：『月刊音楽』に見る一九七〇～九〇年代の西洋音楽受容」では、『月刊音楽』から読み取れる具体的な事柄を細かく分類し、まず、一九七〇年代から一九九二年までの時代的な背景と主な動きについて論じる。次に、実際、音楽ホールの状況から、音楽ジャンルについて、また、主にどのような作曲家たちの作品が演奏され、取り上げられていったのか、さらに、国内および国外における演奏家たちについてもデータをもとに分析する。最後には、現代音楽と音楽評論活動について論じ、どのような動きがあったのかを検証する。

最後の「第Ⅳ章：『月刊音楽』の時代と現代」では、これまで概観し述べてきたことに基づき、『月刊音楽』が誕生した一九七〇年から廃刊になる一九九二年までの時代における韓国の西洋音楽受容を振り返り、この雑誌が韓国の西洋音楽文化受容にとって持っていた現代的意義を再確認した上で、簡単な「結び」を述べる。

メンデルスゾーンにおける演奏会用序曲の成立

―《静かな海と楽しい航海》と《美しきメルジーネの物語》を中心に―

小石　かつら

本論文は、メンデルスゾーンの演奏会用序曲、《静かな海と楽しい航海》と《美しきメルジーネの物語》の成立の詳細を明らかにするものである。

そのために本論文では二つのアプローチをとっている。ひとつは、作曲過程を知るうえで一次資料となる、残された稿を比較した楽曲分析である。これに合わせて、書簡や音楽批評といった歴史的資料の読解を通じて、彼の演奏活動や楽譜出版者とのやりとりという点から改訂過程に切り込むのが、もうひとつのアプローチである。

まず、本論文がメンデルスゾーン研究に占める位置についてまとめておきたい。現在に至るまで、メンデルスゾーンの演奏会用序曲の研究については、おおまかな成立状況、または純粋な楽曲分析が行われてきただけであり、改訂作業の詳細プロセスにまで立ち入った研究は着手されてこなかった。その意味で本研究は、メンデルスゾーンの演奏会用序曲の成立研究の成果を引き継ぎながら、その研究の射程をより深化させたものとして位置づけられる。

また本論文の意義は、メンデルスゾーン研究にとどまるものではない。本論文は、演奏会用序曲という作品ジャンルの誕生についても同時に考察を加えるものであるからだ。その意味で、本論文は、十九世紀において開花することになる標題音楽や交響詩といったジャンルの研究にもあたらしい見解を提示するものとなる。

以下、本論文の構成にそって、本研究の内容をまとめよう。まず、「はじめに」において、メンデルスゾーンが作曲家であると同時に、演奏家でもあり、さらに演奏会の企画にまで積極的にかかわった人物であったことを確認する。もちろんそこでは、当時成立しつつあった演奏会という新しい音楽の受容形式についても言及することになる。メンデルスゾーンは、ただ作曲だけを生業としていたわけではなく、自ら作曲した作品を各地に運び、そこで演奏して聴かせる演奏家でもあった。そして彼は、演奏会の出来や、批評を肌で感じ取りながら、みずからの作品の改訂へと反映させていったのである。ここに、メンデルスゾーンの作品の成立研究が、現存する複数の改訂稿の比較だけでは不十分であることの理由が提示される。

第一章では、メンデルスゾーンの序曲の改訂作業がどのような経緯で行われたのかを提示し、あわせて演奏会用序曲というジャンルが、この時代に意識されはじめたことを、音楽評ならびに当時の演奏会のプログラムの変遷から立証している。

第二章、第三章、第四章は、《静かな海と楽しい航海》と《美しきメルジーネの物語》の成立過程の具体的な考察である。まず第二章において、この二つの序曲の改訂についての言及を、現在入手可能な全てのメンデルスゾーンの書簡、回想録から取り出し、それを基軸に、作曲改訂段階の詳細を時系列にしたがって再構成している。同時に、主だった演奏会評や出版社とのやり取りを重ねあわせることで、現存する改訂稿および失われてしまった原稿などの特定も行う。

第三章では《静かな海と楽しい航海》、そして第四章では《美しきメルジーネの物語》の改訂があつかわれる。ここでは、手紙などに残された改訂への言及が、実際どのような改訂としてとどめられているのかを確認することが目的である。とくに本論文では、古典的なソナタ形式への批判的な乗り越えと同時に、識者を満足させるために巧妙にソナタ形式を装っても見せる作曲技法の高さを強調している。これは先行研究では指摘されてこなかった新しい論点である。

当時、メンデルスゾーンが意欲的に演奏会用序曲に取り組んだということは、彼が流行に敏感に反応していたといことを意味する。彼が音楽評を気にしながら改訂を続けた姿勢にも、メンデルスゾーンが、聴衆が望んでいるものを絶えず気を配りながら作曲を続けていたことの証左となるだろう。ただしそこから、メンデルスゾーンが、流行や聴衆におもねる作曲家であると結論付けることはできない。改訂の分析からも明らかになったことだが、彼は、演奏会用序曲という新しい形式を使いながら、新しい音楽表現を模索し、識者と聴衆の双方を満足させるような作曲活動をおこなっていたのである。

室町水墨画と五山文学
―十五世紀後半における周文派と禅林の詩画軸制作システム―

福島（城市）真理子

室町時代の水墨画の中でも、画僧如拙・周文の生きた応永・永享年間に隆盛を迎えた「詩画軸」は、画幅上に、「画賛」と呼ばれる禅僧による漢詩文がしたためられていることが特徴的である。詩画軸では、特定の人間関係の中で、送別のため、あるいは書斎に寄せるためなどの目的があって山水図や山水人物図等が描かれており、画賛も同じ目的にそって制作されている。そのよう

な詩画軸の「機能」についての了解のもと、画僧や詩画軸の依頼者、着賛者たちによる詩と画の制作システムが禅僧社会にはあったと考えられる。本論文の主要目的は、十五世紀後半の周文派の作品と画賛や史料を検討することで、詩画軸制作のシステムのありようと、水墨画と五山文学との関連について具体的に分析し、当時の周文派の絵画制作の様相を明らかにすることである。本論文は二部構成になっており、第一部が三章、第二部が二章からなる。

第一部第一章では、周文の弟子である画僧岳翁と東福寺の禅僧了庵桂悟との関わりに注目し、当時の詩画軸制作のシステムの一端を明らかにすることを試みた。個々の岳翁画の賛や史料を検討することで、実は、了庵桂悟が詩画軸制作の発注と関わるエージェントのような役割をはたしていたという結論を得た。また、岳翁の作風展開を精密に分析し、十数年単位での画風の変化を明らかにすることで、十五世紀後半の水墨画の動向との連動を考察した。

また、第二章では、岳翁の個々の作品について画賛と作品を併せて検討した。賛者については、彼等が東福寺や伊勢という地縁と関わることを確認し、作品については、画僧ならではの主題の理解があって、それが絵画表現上の工夫に反映していることを指摘した。

第三章では、活躍期が重なる雪舟と岳翁の絵画表現の比較を試みた。両者の初期にあたる十五世紀中葉の作品には制作年代を推定できるものがあり、それらが、確実な作品がない周文の作風―周文様式―を復元できる手がかりとなるとする試論である。

以上、第一部は三章構成によって、岳翁と了庵桂悟をめぐる詩画軸制作を軸に、同時代の雪舟の作品や史料を関連づけることで、周文没後の周文様式の展開と詩画軸制作のシステムのありようについての試論を提示した。室町水墨画の研究では周知のことだが、周文の確実な真筆作品は皆無であり、多くの伝周文作品をより分け、個々の画人を同定することが研究の歴史であった。周文の後継者たちについての具体的な研究成果は、「周文」そのものについても示唆的な意味を持ちうるのである。

第二部は、水墨画の主題と表現について、特に五山文学との関係を考察した。第二部第一章は、宝徳二年（一四五〇）の年記のある詩画軸「沙鷗図」を素材に、その三十名の詩文僧の詩と、南禅寺の禅僧景南英文による序文を詳細に分析し、この詩画軸制作の事情・背景および「沙鷗」という主題の意味を検討した。同時に、詩画軸制作のシステムや、禅宗社会の政治性とヒエラルヒーが、どのように投影しているのかについても考察した。

第二部の第二章では、五山文学における禅僧の文人趣味の表象として「煎茶」に注目し、「煎茶」と関わる絵画、画題や図様を

検討した。五山文学中に散見される画題によれば、当時、煎茶で知られる特定の文人―特に、盧仝や蘇軾―が描かれていたことが判るが、十五世紀後半から十六世紀初めにかけては個別の意味が失われて、いわば、「文人」を示す「記号」のように、煎茶の主題やモティーフが山水図などの画中に描かれるようになっていくことを指摘した。

以上、第二部は、禅僧の文人志向・文人趣味に力点を置いて検討したわけだが、十五世紀という「和」と「漢」の文脈が変化した時代に、禅僧たちの詩文によって「絵画」が持ち得た意味と、詩画軸の「機能」、そしてそれらが五山文学の動向と共に変化した様相について考察した論攷である。